


Supported by  日本 THE NIPPON
財団 FOUNDATION

「笹川杯訪日団 2018」
訪日感想文集

 公益財団法人日本科学協会
業務部 国際交流チーム

目 次

★笹川杯全国大学日本知識大会（18名）

| | | |
|----------|------|----|
| 对外經濟貿易大学 | 吳 娜 | 3 |
| 对外經濟貿易大学 | 奉煜坤 | 4 |
| 对外經濟貿易大学 | 宇文志鴻 | 5 |
| 北京大学 | 邱 碩 | 6 |
| 北京大学 | 王 玥 | 7 |
| 北京大学 | 凌歆歆 | 8 |
| 天津科技大学 | 王衍洋 | 8 |
| 天津科技大学 | 張 杰 | 10 |
| 天津科技大学 | 朱凱月 | 11 |
| 東北師範大学 | 周方雨 | 12 |
| 東北師範大学 | 段天承 | 13 |
| 東北師範大学 | 隋曉周 | 15 |
| 黒龍江大学 | 陳 鑫 | 16 |
| 華東師範大学 | 于 洋 | 17 |
| 天津外国語大学 | 周姍姍 | 18 |
| 東北財経大学 | 李 春 | 19 |
| 福建師範大学 | 何佳佳 | 20 |
| 華東理工大学 | 蔡弋鳴 | 21 |

★笹川杯作文コンクール（4名）

| | | |
|-------------|-----|----|
| 合肥学院 | 史春艷 | 23 |
| 厦門大学 | 鄭羽揚 | 24 |
| 華中師範大学 | 王 珺 | 25 |
| 浙江中医薬大学濱江学院 | 孫 斌 | 27 |

★笹川杯日本研究論文コンクール（3名）

| | | |
|---------|-----|----|
| 北京師範大学 | 左華芸 | 28 |
| 北京外国語大学 | 胡 楠 | 29 |
| 大連民族大学 | 王紫玉 | 31 |

★本を味わい日本を知る作文コンクール（6名）

| | | |
|--------------------|-----|----|
| 天津外国語大学国際伝媒学院漢語言文学 | 喬 暢 | 32 |
| 大連海事大学船舶 海洋工学 | 王恩澤 | 35 |
| 山東大学（威海）計算機科 | 劉昊昕 | 37 |
| 寧波大学 中文学部漢語言文学 | 俞奕如 | 38 |
| 東北師範大学外国語学部日本語学科 | 姜昱先 | 42 |
| 大連海事大学情報科学技術学院通信工学 | 郝 顏 | 43 |

★笹川杯全国大学日本知識大会（18名）

訪日感想



呉 娜

対外経済貿易大学 国際経済 貿易学科 4年

（原文日本語）

今回の訪日は実は三度目日本に来たのだ。とは言え、ほとんど体験したこともないことだった。例えば、針江生水の郷の見学、延暦寺の坐禅体験や沖縄の海などは初めてである。毎日新しい発見ができることにワクワクしていた。印象が一番深いことは三つがある。それは、江戸川清掃工場、沖縄のさんご畑とひめゆり平和祈念資料館の見学である。

日本の街や公園などの公共場所はゴミひとつも見えないほど綺麗であることは中国だけではなく世界各国でもよく知られている。人々はゴミを勝手に捨てない上に、先進的なゴミ処理の技術や設備を持っているのだ。今回江戸川清掃工場を見学して、ゴミ処理の流れやその利益を勉強した。ゴミ処理のプロセスが複雑で、丁寧に気が長くする必要がある。この点では、清掃工場の従業員たちにとっても感心している。ゴミ処理は文字通りゴミを処分することだけではなく、同時に3Rの推進や環境マネジメントなどにも注力しなければならない。中国も早く日本のようにゴミ処理できるといいなと思っている。

私の故郷は中国の貴州で、山のほうだから、海を見たことは沖縄に行く前にはなかった。沖縄に行って、海の美しさを感じるのには実にありがたい。さんご畑の見学でさんごのいない海とさんごのいる海の写真を見て、驚いた。そして、海の美しさは人間が守らなくてはならないと深く思った。経済を発展させるのは国にとって当然のことだが、環境の保護と改善も見逃すにはいけないのだ。なぜなら、環境は汚染されてしまったら元に戻れないこともあるからである。また、環境の保護と改善も未来の経済発展につながると思われる。

ひめゆり平和祈念資料館でビデオを見て、宮良さんから戦争の恐ろしさを教わった。私たちの代は、平和の時代に生まれ、戦争ということに対して本物の認知がないため、平和の大切さもよくわからない。ひめゆり平和祈念資料館は私たちを注意して、いつも平和を強調する存在である。戦争や無意義な争いを防ぐために、現代生活にはそういう存在が必要だと思う。戦争の前には国籍や性別もなし、誰であろうか、家族や親友及び生きることしか頭にならない。だから、目の前の幸せを大事にするべきだと思う。

今回の訪問はとても楽しかった。そしてたくさん勉強した。今度の訪日を楽しみだ。仕事のため、あるいは修士として日本に行きたいのだ。

感想を少し



奉 煜坤

对外経済貿易大学 日本語学科3年

(原文中国語)

今年は2019年、日本語に触れて十年目で、日本を訪れるのは二度目です。

大会で入賞した喜びはとっくに時間に薄められ、大学三年生にとってこの上なく焦る冬休みを過ごした後、日本で悠々と送った百七十六時間、ことに比叡山で漂った十五分は、自分にとって光と落ち着きを得られたひとときでした。

前に日本に留学していたのは七年前で、比べて今の日本はそれほど大きく変わっていないと思いました。大都市は大都市、梅田はあの梅田、あの迷路はやはり迷路のままでした。最大の変化を言うならば、接触した日本人かもしれません。十年来日本語を学んで、大小の交流活動に参加し、中国に対して強く興を見せる日本の友達が増えてきていることに気づきました。自分の目で中国を見たい、中国のさまざまな新しい事物を知りたい、中国の若者の物事に対する見方を知りたいといった興味や言葉には、国境との必然的なつながりはありません。討論会では、パンダ杯を受賞した日本の友達が私に、私の故郷、成都で見聞きしたことを語りました。顔真卿の特別展では、中国語、日本語の賛嘆の音が絶えずに耳に入り、小さな声でそばの人に作品の筆法と構造を解説している日本人もかなりいて、えせ書道愛好者の自分には敵わないと恥じ入りました。東京の街では、チームのメンバーが中、日、英の三言語で討論し、はしゃいで、日本の友達が中国語の歌「春天在哪里」をそのまま歌って興を添え、交流晩餐会では一文字ずつ「中国に留学したい」と話していました。こうした感覚は、七年前とはっきり異なります。

数日前、北京のバレーボールチーム日本人メンバーたちと飲んでいると、仲良くしている日本のおじさんがコップを挙げて「君とのおしゃべりは日本人としているみたいだ」と褒めてくれました。日本語を十年も学び、大学に行かずずっと専攻の日本語を続けるか金融を学ぶかで決心がつかずにいました。おじさんの話がお世辞なのは分かっている、日本語の理解に対しても訪日で知り合った孔先生と阿羅さんの中日同時通訳にはとても及ばないものの、この数日の交流、体験、他大学の優秀な学生との「切磋琢磨」を経て、自然と日本語の道を引き続き歩く可能性が見えてきました。

この数日の乱雑ながら明瞭な感想で、耳にまとわりついているのはやはり東京の街角での歌です。この春の中、前進する足どりは多分もっとしっかりするでしょう。感謝感謝！

日本科学協会の先生たち



宇文 志鴻

対外経済貿易大学 日本語通訳科大学院修士課程 2年

(原文日本語)

大変お世話になりました。対外経済貿易大学の宇文志鴻です。八日間の笹川杯訪日交流見学があっという間に終わりました！日本科学協会の先生たちから至れり尽くせりおもてなしをもらいまして、ここでありがたい気持ちを伝えたいと思います。

短い時間にわたり東京・沖縄・京都・滋賀・大阪のうつくしさをきちんと味わっていました。できるだけ八日間でより多くのところに行って見ることを考える上で、先生たちは詳細なスケジュールを作ってくださいました。本当にありがとうございます！

今回の旅はただの観光ではなくて、江戸川区ゴミ清掃工場見学や生水の郷見学などのスケジュールもありました。環境保全分野において、日本を対象に先進な管理体系や教養育成を勉強しなければなりません。日本は特に子供たちの教育を重視しています。清掃工場の記録簿に子供たちの感想がいっぱい書かされます。生水の郷でも、毎年の川清掃を子供たちに参加させて、環境保全の大切さを感じさせます。たしかに、環境保全は一人の責任だけではなく、社会全体を団結して守るべきものです。子供は朝にのぼっている太陽であり、未来のために、子供教育を中心すべきです。

環境保全のことだけではなく、沖縄ひめゆり平和記念館で、悲しい物語りを聞いて、戦争の痛みを再現して実感されました。中国においてもこのような戦争平和記念館が設置されています。過去のことに對して恨み気持ちを持つことではなく、戦争の残酷から平和の幸せを感じさせ、戦争の痛みを感じるからこそ平和のことを大切にしています。わたしたち両国の若者も平和のために、小さな架け橋をかけて、ちりも積もれば山となり、自分の力を尽くしなければなりません。

そして、東京において、少子化現象について日本の大学生と盛り上がった討論を行いました。わたしたち若者の背中に背負っている責任は何か。今、両国が直面している問題は似ているけど、裏で絡んでいる影響要素が異なります。日本は先進国として少子化問題はもう何十年になったが、未来は中国もかならず重大な少子化問題が現れるはずで、グループのみんなとともに一緒に解決策を探し、両国の実況を身近に話し合いました。たくさんの友達と出会って、それは今回の旅でもらった最大の宝物です！

最後に、今回の旅を通じて個人的な小さな目標も達成しました！孔先生のおかげで、初めての同時通訳実戦を試しました。不足のところはまだたくさんありますので、もっと頑張らなければなりません！

一期一会とはいえ、必ず二度と会うことができます！これからもよろしくお願ひします。

笹川杯での訪日の感想



邱 碩

北京大学 日本語学科 4年

(原文中国語)

初めに、今回の訪日団のために心がこもった手配、行き届いた配慮をしてくださった日本財団と日本科学協会にとっても感謝しています。日本に降り立ち、深入りして、日本の先進的な経験を学んで、そして日本人と交流する機会に恵まれたことは大きな喜びです。今回の訪問は印象深く、啓発をますます感じるものでした。日本は資源の不足している国で、人口大国でもあります。日本は発展する過程で無数の困難を経験し、また今の中国と同じ環境問題やさまざまな社会問題を抱えていました。日本政府は長期にわたる苦しい努力と奮闘を経て、日本の全社会から積極的な参与と協力を受けつつ、環境整備の任務を完了し、経済発展と環境保護との平衡を得ました。日本政府と各自治体、国民全体の共同の努力のもと、今の日本は全世界でも環境保護、清潔さ、発展、豊かさ、安全のきわだつ国となっています。それぞれの面に我が国が参考とするに値する貴重な経験や方法があります。

現在の我が国は歴史上で最も高速の経済成長と大幅に発展する時期を経験していますが、同様に環境や資源などの面で巨大な課題に直面しています。日本の発展過程と対比すると、我が国は30年前の日本が直面していたのと同様問題にぶつかっていることはすぐ分かります。我が国の現実的な状況と結び付けて、日本の経験と教訓を吸収し、現在の発展段階にある中国に適した特色ある発展と管理の方法を定めて、段階に分けて我が国の経済の現代化と社会の精神文明の建設を実現することは完全に可能です。

日本は中国と同じ農業文明に属していますが、全体の都市化と近代化のレベルは我が国よりはるかに高く、都市人口の占める割合が高く分布も集中しており、近代化したごみ分別処理、高度な都市の美化、文明の構築は、現段階の中国では実現しにくいでしょう。しかし一方、日本にはない広大な国土面積により我が国にはもっと大きい発展の余地と国内市場があります。日本より大きい生産能力と消費能力があるため、前世紀末の日本のようなバブル崩壊が短期中に起きる可能性はあまりありません。双方それぞれに優位がありますが、長い目で見ると、我が国の東部で産業の高度化が進むに従って、在来産業が西部へと移転し、全国規模で東から西へ都市化が進んでいます。人口は珠江デルタ、長江デルタと北京・天津地区に集まっており、東部地区と西部の一部地区では向こう20年以内に少しずつ日本社会のような経済発展と環境保護の平衡が得られる見込みがあります。都市の美化、文明の構築などの面では日本の現在の状況に近づけるでしょう。

日本を訪れるたび、この国とこの民族の偉大さに感慨を覚えます。日本は第二次世界戦争の廃墟から再建した国で、無数の困難を経験しました。中日両国の友情が永遠に変わらず、二者の協力が絶えず新しい成果を得られるよう望んでいます。そして両国の民間の交流が日に日に繁栄し、絶えず中日の親善に貢献する人がいますように。

活動の感想



王 珮

北京大学 日本語学科 4年

(原文中国語)

2019.2.19-2.26は、たったの八日間ですが、また日本に対する感覚が深まりました。

半年前に日本での一年間の留学生生活を終えたばかりで、日本に対する新鮮みはとっくにありませんでしたが、今回度の旅行ではもっと多い感動とすばらしさが得られました。8日は一年に比べると短いですが、残った印象は半分も浅くありません。

印象深かったのはスケジュールです。普通の旅行では行かなさそうなところ、ごみ処理場や針江生水の郷などを見学したことで、日本社会への理解が深まり、表面に止まらず日本を理解できました。また座禅体験も、河豚を食べたのも初めての経験です。

しかしもっと感動したのは同乗した愛すべきすばらしき人々です！大学や専門の違う人と知り合えてうれしいです。それまで何も関係がなかったとしても日本という点で結びついた、という奇跡をととても不思議だと感じています。道中はみんなからたくさんお世話になったと感じています。朝寝坊してルームメイトに時間で呼び起こされ、ケガをしたときは誰かに絆創膏をもらい、荷物がたくさんあるとき持ってくれる人がいて……ささいなことですがこの上ない温もりを感じました。またこの機会に多くの大学や専門の友達ができました。

この活動は多くの日本人と知り合う機会もくれました。彼らと意見を交換（微信）して雑談できるのはとても楽しくて、仲良くなれたのはとても貴重なことです。こうした活動は本当に交流の場を築いてくれ、しかもさまざまな日本人と出会えるので（それまでに知っていた範囲内の日本人はみんな京大の学生でした）、日本人に対する認識が広がりました。

最後、この機会により中国の青年が日本に対する第一印象を形作ることができると感じています。チームには初めて日本を訪れる人が多く、彼らの日本に対する印象はいずれもよいものです。このような活動にはもっと多く日本語/日本と関わりのない学生が参加するともっと良くなると思うので、「感知日本」作文コンクールの枠を増やし、日本語/日本を知らない人をもっと日本へ連れて行き、日本語専攻以外の人が日本に対する印象を形作る効果を高めてもよいのではないのでしょうか。

この活動の景色と体験では美食が印象深いのですが、最も身になったのはやはり中国人とであれ日本人とであれ人との交流です。何度も言われてきたフレーズでしょうが、やはり「集わば燃える火、散らば満天の星とならんことを」と言いたくなります。あの8日間の火はもう消えても、その思い出は星々のように参加したみんなの心の中できらめくでしょう
～

笹川杯訪日団で感じたこと



凌 歆歆

北京大学 大学院日本語研究科修士課程1年

(原文日本語)

この度の訪日イベントに来る前に、科学協会の方々が作成していただいた日程表を何度も何度も読みました。「どこで何をするのか」や「誰と何について交流するのか」を事前によく知らないと、参加しても何もわからないままスッと終わってしまうかもしれません。日程表を見て、東京では皇居や江戸川区ゴミ処理場、慶應義塾大学で見学し、フグとしゃぶしゃぶなどの日本料理を体験し、日本人学生と少子高齢化について話すことが決められているのがわかった。

「じゃ、準備しないと」と思って、行く予定のある場所や日本料理の資料を集めて豆知識として覚えときました。その場で先行資料と比較しながら見学していくのがより意義があると思いました。しかし、場所や料理の方はネットで調べやすいですが、日本人学生と交流会をするにはテーマについて相当な知識が持っていないと、議論がなかなかうまく行きません。慌ててネットで調べても議論に値する意見を私などは言えるのか、とても心配でした。

幸い私の所属する大学の図書館では、世界でも有名な高齢化のテキストブック『Aging: concepts and controversies』という本があって、興味津々に読んで大変勉強になりました。ネットで調べた資料より、まとまった本の方が信用度が高い。論外ですが、科学協会が日本で処分される教育・研究図書を中国の大学に寄贈する活動をなさっていることを訪日中聞きましたが、大変素晴らしい国際貢献であると思います。一人の中国人として感謝申し上げたいと思います。事前の資料調べのことに戻りますが、日本人学生の方も時間をかけて議論を重ねて、質の高い資料をまとめて中国側に送りました。お互いに事前の準備があったからこそ、真の交流ができると思います。以上が今回の笹川杯訪日団で一番深く感じたことでした。

感想



王 衍洋

天津科技大学 外国語2年

(原文中国語)

中国語で感想を書き、たいへん申し訳ありません。まだ二年生なので日本語のレベルがまだ改善中なうえ、新学期でやることがたくさんあり時間に余裕がなく、日本語で書くと時間がかかって間に合わない恐れがあるので中国語にしました。どうか大目に見てください

い。(しかも日本語で表現できない感想やレトリックもあるので笑)

日本は今回が初めてなので、感慨深いものがあります。それまでの日本に対する印象は日本ドラマ、アニメ、漫画、文学作品の中から知ったものばかりです。いまや近距離で日本に触れ、更にその魅力を体得できます。日本は文化の輸出に強い国で、日本に住んでいない自分にもさまざまなルートを通じて日本の文化を知ることができます。今回の訪問で最も直観的に体得したことは、秋葉原のアニメ文化、どこにも見られる大小の神社仏閣、さまざまな和風建築や和食のどれもが、無形の中で日本の文化を体現しているということです。日本の文化の輸出はすでに多くの細かいところに見られ、外来の文化を参考にすると同時に自国の独特な文化を残すこともできるのは、とても良いことだと思います。

今回のスケジュールではいくつかとても面白いところに行きました。一人で旅行するなら恐らく選ばないところですが、行った後は収穫が巨大だと感じています。まず最も直観的に理解したのは、日本での生態系についての態度と扱いです。江戸川区のごみ処理場、サンゴの栽培、針江生水の郷の生態系のどれもが、人と自然の調和した付き合いという願望を表しています。「自分の郷里は自分で保護しなければ。」これは見学中に聞いた中で最も感動した言葉です。生態環境管理の面で、中国はまだ日本に及びません。将来、中国が日本を参考にして、よりよい方向への発展に努めることを望んでいます。次は、観光する過程で体得した日本本土の文化と歴史です。行った観光地はすべて日本の伝統文化についてごく代表性のあるところばかりで、世界遺産もありました。日本の歴史は中国ほど悠久でないものの、これらの建物にはすべて画期的な意義があります。最後は飲食と宿泊での感銘です。毎日のように日本料理を食べました。中国でも一、二回食べたことはあるのですが、やはり本場の正統です。食べてから気づいたのですが、日本料理は比較的に栄養バランスが重視されていて、特にどれかの量が重視されてはいないので、健康な食事かもしれません。まだ慣れなくて、それが何であってどう食べるものか知らず食べたものもあります。(そして納豆とお刺身は本当に口に合いませんでした笑)

そして今回の日本訪問で最も意義のあったところは、中日青年交流会です！二つの国の未来を担う青年がいっしょに討論し交流することができるのは、とても有意義で、両国が共に進歩している証でもあると思います。交流共有会では両国の青年が意見を交換して、それぞれ自国の問題について討論できました。中日両国には対立が生じたこともありますが、隣国としての関係は複雑で深遠です。しかし交流しなければ理解ありません。私たちが中日の友好の橋を築く責任を担えることを信じています。以前にも日本人と交流した経験はあるのですが、同い年となるとやはり初めてでした。両国の若者が衝突して火花が散りました。この交流会を通じてたくさんの日本の友達と知り合い、交流会だけではなく個人的に交流することもできて、しかも討論会のごく短い2時間にこだわらない長時間だったのも、とても意義ある討論会でした。

最後はこの訪日団についての感銘です。日本に発つ空港での初日は知らない同士で、まだ少し堅苦しい感じだったのを覚えています。でもそれから数日間、一緒に食べ、泊ま

り、見学して、遊んで、旅行中は助け合いました。この8日間で知らない同士から友達になるまでの過程は、本当にとっても素晴らしいものです。別れは名残惜しいものの、知り合ったことはすばらしく、共に過ごしたのは縁です。私は永遠にこの思い出を大切にします。

以上が今回の感想です。

忘れられない旅——一期一会



張 杰

天津科技大学 日本語学科4年

(原文日本語)

日本語の中に「一期一会」という言葉があります。人生のすべての出会いを最後にして、私たちはこの出会いを大切にしなければならないという意味です。これは日本人が持っている気持ちかもしれませんね。しかしすべての人にとって、それぞれの出会いは生命の中で最も貴重な財産だと思います。

昨年の11月に北京大学で「笹川杯」全国高校日本知識大会に参加した時、皆さんと初めて出会いました。その時の出会いから関西空港の別れまで、本当に楽しくて悲しい話を読んでいたような気がします。私は日本という国に興味がありましたので、たくさんの日本についての本を見たことがあります。この国の第一印象はすべて本で知りましたが、今回の8日間の旅日は、本当に日本を実感しました。一言で言うと、「百聞は一見にしかず」とは最も適していると思います。例えば、東京では、江戸川区ゴミ処理場を見学し、日本は公共教育に対する重視を深く感じています。生活の中で発生したごみを集中して粉碎・燃焼処理した、ごみを粉末状にし、セメントなどと混合して煉瓦を作って道路を敷くことができます。燃えないごみを粉碎して埋め立てに用います。ごみ燃焼過程で発生する熱は生活暖房や発電などに利用されます。ゴミは科学的に処理されて完全に利用できる物質になっており、日本の科学技術の発達には驚かされます。想像していたのと違って、廃棄物処理場は内部がきちんとしていて、秩序があり、ほぼすべて自動化されています。処理場をオープンな機関にして、工場が正常に機能を発揮すると同時に、教育機能をつけて、環境に優しい理念をすべての見学者に伝播します。私はゴミ処理の点で日本にとっても感心しています。これも中国の参考になるところだと思います。

また、日本のインフラ整備は非常に整っており、非常に人間性があると思います。例えば、公衆トイレには、必ず障害者のための設備が設置されています。そして、とても清潔で、臭さが全然ありません。この点は日本が作ったのがとてもいいと思います。

日本人の素質の高さは礼儀面で十分に表現されています。ホテルの従業員は私たちらう

なずいて挨拶をして、毎朝挨拶して、笑顔をして迎えました。一般に食事中もウェイトアをテーブルに呼んで注文することはではなく、テーブルには従業員を呼ぶベルが設置されているが、ほとんど誰も押していないのに対し、従業員は通常、各テーブルのそばを通過して、お客様が必要とするサービスがあるかどうかを確認しています。つまり、礼儀正しく、人に対する態度が謙虚だと考えます。また、バス運転の運転手さんは私たちに声をかけてくれたり、荷物の積み卸しをしたり、私たちにやらせたりしないで、そして、いつもきちんと荷物を並べてくれます。本当に感動しました。

討論会に参加し、日本の大学生と少子化について話し合い、中日両国の国情の違いを感じました。その後、日本の電車に乗って、東京博物館と浅草寺などを見学しました。私は下手な日本語で彼女達と話をし、相手の趣味、将来の志と家庭の状況などを理解して、ずっと楽しく笑って、老友が再会したようで、あの心を打つシーンは長い間忘れられません。日本の大学生の情熱と活発さを実感して、私も中日交流のすばらしい未来を見ました。

今回の日本の旅で、感じたことはたくさんありました。日本の清潔さ、日本の笑顔サービス、日本の夢のような清浄な空、日本学生の熱い交流など、すべてが忘れられません。帰国後、報告会や写真展を通じて、体験文章や体験談、思いを込めて得られたことなどを発表し、訪日活動の成果を最大限に拡大します。日本国民の情熱と友情を伝えると同時に、私たちは経験と啓発を持って更に奮発して勉強します。

以上、ありがとうございました。

日本初体験——「笹川杯」訪日旅行記



朱 凱月 津科技大学大学院 日本語言文学研究科修士課程 2年

(原文中国語)

2019年の元宵節、初めて日本を訪れ、全国各地から集まった30人以上の優秀な学生たちと楽しい八日間の訪日旅行を過ごしました。その間の思い出が多すぎて、紙幅の都合上どれもこれもは書けないので、最も胸を熱くした部分についてだけ述べます。

「少子化に関する問題」の日中青年シンポジウムでの尾形理事長の講演に深く感動しました。八十を過ぎたお年寄りが、自らの行動をもって中日両国の友好交流のため積極的に努力し、飾らない言葉で自分の中日両国の青年への関心を伝え、中日の少子化問題に向き合って、「現代人は60歳になってもなおとても若く、八十、九十までずっと働ける。ならば我々の世代が若い人たちを支え、若い人たちに次の世代を発展させてもらおう」と語りました。それを耳にして涙が出そうになりました。感動の涙でもあり、恥ずかしさの涙で

もあります。感動の理由は言うまでもありませんが、恥ずかしかったのは若い自分にそういう覚悟がなかったからです。

針江生水の郷を見学に行ったとき、案内のおじいさんが誇らしげに自分の村落を紹介してくれたのですが、水の管理に言及したとき、「私たち自身の川は私たち自身が保護して、自分できちんと整理する」とありました。確かに川の管理はとてもきちんとしていて、中国国内では当地のように透き通って底が見える川を目にしたことはありません。

この数年、中国の経済発展はとても速く、国民も中国はとっくに日本を越えたと大言壮語しています。一部のハード面では中国が日本よりやや進んでいるかもしれませんが、文化やソフトパワーの面ではまだ距離が開いています。若い世代の自分が日本を訪れる機会に恵まれ、中国と日本の間の隔たりを理解したので、自分たちの世代が努力することによりよい自国を築き上げられるよう、そして中日の友好的往来のために自分のわずかな力で貢献できるよう望んでいます。

訪日感想



周 方雨

東北師範大学 日本語学科 4年

(原文日本語)

今回の日本への旅はいろんなところを巡って、いろんなことを経験して、各地の美しい景色はもう頭に刻んである。でも、私に最も印象を残したのは、やはり皆との交流に違いない。

訪日の三日目、東京で日中若者討論会に参加して、日本の学生たちと中日両国の少子化問題についてディスカッションした。両国の深刻化した社会問題の発生した原因や解決するための対策などの方面から意見を交換して、お互いに理解を深めてきた。討論会が終わった後、私たちの訪日団は、いくつかのグループに分けられて、日本の学生たちと東京のスカイツリーや浅草寺などを観光した。途中でも、日本の友たちといろいろ話し合った。大学で日本語を専攻する私にとってもこのような日本人と交流するチャンスは珍しい。そして、日本人の皆さんも中国に興味を持っているから、とても楽しかった一日を過ごした。夕食が終わったら、皆は離れたくなくて、少し悲しい雰囲気だったが、連絡先を交換して、また会おうと約束した。

日本人だけではなく、わずかの一日以外の時間は全部中国人の皆さんと一緒に過ごした。この間、私は多くの友達ができ、皆さんはほとんど日本語を専攻する学生なので、学校生活や日本語の勉強について話して、私の視野が広がって、考え方もいっそう豊かになった。その一方、日本語の専攻生ではない学生たちも日本に興味を持っている。そのう

ち、自分で日本語を学んで、とても流暢に喋られる人もいて、私はとても感心した。

そのほか、私は日本科学協会の先生たちにも、関心を与えられた。海辺にちょっとしただけの傷がついたが、先生たちが全部状況を聞いたり、キズテープを貸してくれたりした。先生たちの細かい関心に、感謝の気持ちが溢れる。

日本科学協会の先生たちのおかげさまで、私が初めて日本へ旅行に行った。今回の旅行は長い人生にも忘れられない貴重な経験である。短い八日間だったが、美しい風景と面白い見学で、とても充実であった。しかし、目で見える風景より、もっと大事なのは、人と人の交流である。私は、今回の旅にもらった友情の暖かさを惜しんで、皆さんの再会を楽しみにする。

日本で感じたことを少々



段 天承

東北師範大学大学院 日本語研究科修士課程 2年

(原文中国語)

東京湾を横切る橋梁の巨大な網と都会の森が、江戸川区の平屋が並ぶ中の地味な小さい工場に映えていました。建屋は高さがなく、薄い青のコンテナを引いた車が何台も出入りして、立ち入っても何ら臭いはしないので、物流会社の倉庫かと思ってしまいそうです。高くそびえる煙突に気づかなければ、そこがごみ処理場だとは信じにくいでしょう。

東京都二十三区清掃一部事務組合の一員として、規定により江戸川清掃工場には見学に一般開放する義務があるのだそうです。見学者からするとごみ処理場は全体が巨大なガラス箱で、ガラスを通して場内を詳しく観察できます。説明係は同時に工場の労働者でもあり、同工場のごみ処理の技術を解説しながら、それぞれの仕事場と操作室を見学させてくれました。

工場のごみ処理の技術は複雑ではありません。各家庭から回収車が集めてきたごみはごみ堆積場に流し込まれます。するとすぐにごみがクレーンで炉内に運ばれ焼却されます。焼却で発生する熱エネルギーは発電またはボイラーに用いられ、発生する有害ガスと汚水は何重もの分解を経て自然に放出されて、残った固体残渣は圧縮を経たてから建築材料として再利用されます。

この一連のごみ処理技術には何も不思議といえるものはありません。私の郷里にある中国石化の工場の敷地面積はこの工場の数十倍あり、タンク置場と装置の構成する鋼鉄の森は果てしないほどです。そこでの工業廃棄物の処理は最も枝葉末節のプログラムだけです。しかし郷里の工場を思い出すと、近くでは鼻を刺すアンモニア臭がしていつも痛ましい灰色の空でした。この小さいごみ処理場の窓の前を吹く風は清らかで、窓の外には澄みきった

の空と遠くへゆるやかに伸びる江戸川……

日本の美しい都市環境を支えているのは決して一つや二つの工場ではなく、主要なのは日本国民全体の自然発生的な環境保護の観念です。日本のごみの分別は主に市民が自ら行っており、しかもきわめて複雑です。ごみは可燃ごみ、不燃ごみ、ビン缶、ペットボトル、粗大ごみなどに分けることになっており、毎日特定の種類のごみしか出せません。各家庭で自治体が指定する透明なごみ袋を備え付けており、ごみの分別を厳格に行っていないと気づいたら、回収車はその家のごみ回収を拒絶します。自転車、家具などの粗大ごみを捨てる時は、中国のように廃品を換金できるだけでなく、高額のごみ処理費がかかることもあり、費用はもとの商品価格の三分の一に上ることもあります。たとえそうでも日本の多くの家庭はさらに十数万円かけて家庭用コンポストを購入し、一般的な生活ごみを家庭内で分解しています。世界でも他の国では想像しにくいことです。

以前、日本の学友に「中国人にごみを分別回収する習慣はあるか？」と聞かれたことがあります。しばらくどう答えればよいのか分かりませんでした。中国人にもごみを分別回収する習慣はもちろんありますが、中国人が分別するのは廃品買い受け所で換金するためです。いったん経済的利益というインセンティブを失ったら、このような「美德」はすぐに大部分の中国人から跡形なく消えてしまうでしょう。これは日本人が経済的利益を犠牲にしても厳格にごみを分別回収する習慣とはまるで違います。

日本の都市住民の環境保護の観念がごみに対する過剰な危機意識に源を発するものだとしたら、日本の農村住民は自然環境の保護について、自然に対する素朴な愛情からであることのほうが多いでしょう。滋賀県大津市の針江生水の郷では、集落のお年寄りたちが地下からの湧き水を溝渠で各戸へと巧みに引き込んでいます。下流の住民が使う水に影響させないため、溝渠の中で洗面する人はおらず、自宅の蓄水池に引き込んでから利用しています。各家庭の蓄水池ではみな鯉が飼われており、目的は鯉の習性を利用して生活廃水を十分に浄化することだそうです。最後に、この小さい湧き水は村落全体を灌漑した後、澄みきって甘美なまま、1.5キロ離れた琵琶湖へと流れ込みます。当地の七～八十歳のお年寄りたちは哲學家のような姿勢で、心をこめて郷里の周囲の小宇宙を守り、人と自然の関係についての理解を実践していました。

環境保護事業が中国でなぜ進めにくいのかはつまるところ、一体どれだけ目先の利益を放棄して、引き替えに将来の青い水や空を手に入れるのかという問題に行き着きます。環境保護事業は痛みが先に立つからです。目の前の苦しみを飲み込まず、後の果実も待てません。いつときの快楽を貪れば、痛みがより多くなります。日本にも四日市事件、水俣病、イタイタイ病の教訓があります。中国の工業汚染対策について、我が国の工場の汚染対策部門が江戸川清掃工場を見習って、対策の成果を社会に積極的に公開し、進んで社会の監督を受け、低炭素や環境保護の知識の普及に努めることを提案します。環境保護の成果を待っている国民に対しては、東京の住民と針江生水の郷のお年寄りに学ぶことを提案します。彼らは近隣の人のためにそして自然を守り、自然の美德に報いるため、積極的に低炭素の生活様式

を実践して、身の回りの一木一草を大事にしています。

かつての「公害の国」が今の「観光立国」になるまで、日本の環境保護事業は40年もないぐらいです。私たちのスタートは少し遅いものの、現状は当時の彼らよりましです。しかも対策の取り組みはある程度進展しています。数年後には私たち中国人も誇らしく世界に中国の大地の青い水や空を示せることを望んでいます。

わずかな火になって



隋 暁周

東北師範大学 日本語学科3年

(原文中国語)

人生にはいくつかの貴重な思い出があるのが運命だとしたら、今回の訪日の旅はきっとその一つです。道中の美しい景色と口に合う美食、すべてに喜びと満足が得られましたが、同行した先生方や学生たちと一生の親友になれたことこそが最も幸せな収穫でした。

訪日の旅に足を踏み入れる前、気持ちはとても落ち着いていて、家族と元宵節を過ごせないので行きたくないとすら思っていました。今回の訪日の旅の機会を得られたことに感謝と幸運とを感じるべきだと事実は証明しています。自分は同行した学生たちよりも年下だったのでたくさん気を遣ってもらえました。また彼らからは日本語に関する知識だけでなく、ことの進め方、身の処し方も学びました。

最も成長させてくれたのは日本の学生と「少子化・未来を担う自分たちができること」を討論した日です。孔先生と顧先生に励まされ、自発的に学生の発表時間の同時通訳を担当する機会に挑戦しました。それまで黙々と孔先生の毎回の同時通訳を観察して学び、日本語を耳にしたら先に自分の心の中で一回訳してから孔先生の訳を学んできたので、わずか数日とはいえ、準備はできたと思っていました。同時通訳の番が回ってきたとき、私は冷静に、できるだけ正確で分かりやすく訳しました。先輩も何人かいっしょに同時通訳をしていて、彼らの能力は私の上でした。通訳はもっとなめらかでしたが、励ましてくれたので、自信を持ち勇敢に務めを果たすことができました。その後また孔先生の激励を受けたので、改めて日本語を引き続き学ぶ原動力と自信が得られました。また、日本の同年齢の人と食べて遊び、相手の国に対する理解も深まりました。そして横山由果さんと上海で再会する約束をしました。

ぼんやりと、私たちと日本の青年との間には絆があります。全国各地からやって来た私たちはまさに希望を担って、希望を全国に振りまけるよう努力します。「集わば燃える火、散らば満天の星とならんことを」ほど適した言葉はありません。固有の偏見を取り除いて、心の扉を開け放し、目で日本を知って心で日本を感じることも、頼りになるわずか

な火なのです。私は将来「火が野原に燃え広がる」日を期待しています。最後に、日本科学協会が今後もっと類似の大会を開いてくれるよう望みます。積極的に先を争ってまた参加し、みんなとまた出会うことを期待しています！

訪日感想文



陳 鑫

黒龍江大学 日本語学科 4年

(原文日本語)

笹川杯日本知識大会に入賞したおかげで、日本で8日間の旅をしたことになった。日本での生活にすでになれなれになっっていて、しかも、これから日本で働くわたしにとって、別に非常に斬新な感じはなかったが、新しい発見は多くできた。

ぎっしりとした日程から、日本科学協会の皆様が非常に気を使ってくれたことがわかった。本当にありがたいと思っている。数日間の旅の間も、ずっと一緒にいてくれて、本当にありがとうございました。

旅の最初の目的地は東京だった。一年間日本に留学していたのに、残念ながら、東京に一回も行ったことがなかった。今回の旅ははじめての東京である。しかも、国会議事堂やごみ処理施設などの普段なかなか行くことができないところが多かった。特にごみ処理施設の見学では、日本のごみ処理システムを全面的に見ることができた。そこから、様々な勉強すべきところが遭ったので、自分にとっては、非常に収穫の多い見学地だった。

日本人学生たちとの交流会もかなり興味深かった。少子化問題に関して両国の若者たちが自由に考え方をぶつかり合い、最終的に感想を発表した。このような交流会が両国間が理解し合うことに非常に役に立つと思う。特に若者たち。

その後、またはじめての目的地、沖縄だった。大戦時に、沖縄で起きたことを見学し、平和の大切さをより深く覚えた。沖縄の美しい海を眺めて、天国のようなところだなと思っていた。四季を通し夏のような気候で、素晴らしいところだと思う。このあと、もし機会があれば、沖縄でぜひ一時生活してみたいと思う。

再び本州に帰り、自分の二度目の関西になった。去年のちょうど同じ時期に一人旅で関西に行ったことがある。京都や大阪の雰囲気が少しも変わらなかった。これから仕事、生活する京都に予めよろしくと言ったような感じであった。

非常に疲れ果てた8日間だったが、収穫もかなり多い旅であった。日本財団も、日本科学協会も、国際交流において、非常に有意義なことをなされたと思う。これからもぜひ中国の若者に日本を多く見せてください。

「知日派」の育成について



于 洋

華東師範大学大学院 日本語言文学研究科修士課程 1年

(原文日本語)

訪日旅行を終えた時、帰路に着いた私がこの八日間のことを思い出すと、夢のような感じだった。日本財団のおかげで、とても楽しく、有意義な時間を過ごせた一方で、「知日派」の育成についてもいろいろ考えさせてもらった。

まず、我々はなぜ「知日派」になるべきなのか。それは、中国が抱えている課題の解決策を考案するには、日本の経験は十分に鑑みる価値があるからだ。日本は中国と一衣帯水の隣国であり、長い間に中国との交流が頻繁に行われている。日本は中国から漢字や文学を学び、そして自分の文化に生かして受け入れ、自国の文化を開花させる。ひたすら中国から学びまくっていた日本は明治維新以降、西洋先進国から科学技術を吸収し、急速的に経済的発展を遂げた。その結果として、日本は中国を超えはじめ、先進国となった。昔から漢文化に浸っていた日本を考察すれば、中国の足りないところ、すなわち発展の突破口が発見できると思われる。日本は経済発展を重んじる一方で、環境保護、人と自然の調和などへの配慮、それらの問題への対応はまさに中国が学ぶべきところである。中国をより良い国にするには、隣国の日本を知る必要がある。

次に、どうやって「知日派」になれるかについて考え直した。日本財団は「知日派」の人材を育成するには、笹川杯「感知日本」作文コンクール、笹川杯「本で日本を味わる」作文コンクール、笹川杯日本知識大会を毎年開催している。特に日本知識大会で勝ち抜くには相当な知識量が要求されている。だが、読書やニュースなどを通じて日本を知ることができるが、「知日派」が育つとは限らない。それは本で書いている日本に関する情報はごく一部のみであるからだ。江戸川区ごみ処理場を見学しないと、日本のごみ分類やごみ処理技術などが詳しく知ることができないし、滋賀県の針江生水の郷を見学しないと住民たちが水をキレイにする工夫したことに強い感銘を受けないのであろう。今回の旅行を通じて、常に好奇心を持ち、自分の目で確かめ、自分で本に書いていない日本を発見するのは「知日派」の根本的な育て方だと気づいた。

今回の訪日旅行を通じて、日本の「人と自然の調和」、「環境保護への工夫」などに感銘を受ける一方で、これから「知日派」を目指して日本の良いところを学ぶと決心した。とても貴重な経験だったので、改めて日本財団へ感謝の意を表す。

訪日感想



周姗姗 天津外国語大学大学院 高級翻訳学院日本語言文学研究科修士課程2年

(原文日本語)

「日本が大好き？」訪日二日目、東京のドンキホーテに、レジ打ちのところで店員さんに聞かれた。よく見ると、レシートに外国人っぽい名前が載せている。

即答できなかった。「あなたは？」と問い返してごまかした。別に日本がすきではないわけではない。ただ大好きになってもいいか、と少し迷っていた。

日本を訪れたのは今回で二回目だった。前は帰国後、日本のいいところ、そして日本が好きという気持ちばかりを、周りの人にアピールしていた。当時は非常に暖かいおもてなしを受けた。学生討論会の時も、各地住民の方々との交流も非常に楽しかった。しかし、そういった交流を通し、中国のことをあまり知らない人、そして知ろうともしない人が少なくないんじゃないかと薄々感じた。今回出発する前、より多くの日本人が中国に関心を向けてくれるようにしたいなら、中国人として、どうやって行けばいいのか、ずっと考えていたのだ。

そんな私を驚かせたのは、訪日三日目の討論会に集まってくれた日本人の大学生がなんと、訪日団より人数が多かったことだ。しかも、話をしてみると、その中、熱心に中国語を学んでいる人、中国の歴史や、現状に私より詳しい人が多くいることがわかった。私たちのように、さらに私たちより、隣の国を知ろうとしてる人は、日本人の中でもこんなにたくさんいるんだ。知らなかっただけで、多くの日本人は中国に無関心だと決めつけた自分を恥じた。

中国語を勉強し始めたばかりなようだが、一生懸命中国語で報告しようとする日本人の男の子。標準語だけでなく、広東語も熱心に勉強してる日本人の女の子…その人々の情熱から、答えを見つけた感じがした。自分にできること、まずは日本という国を好きなままでいいの信じて、そして日本、日本人を理解しようとする熱意を持ち続けることだ。

国と国との交流は、やはり人と人との交流にあるのだ。勝手に決めつけるのではなく、外見に取らわれず、腹を割って、お互いに話し合うことの重要性を今回の旅がもう一度認識させた。

二年前パンダ杯のメンバーと中国で、20分ぐらいしか交流できなかったけど、不思議に仲が良くなって、その絆は今でも続いている。今回はパンダ杯のメンバーと再会でき、また新しい友達もできて、またいつか会おうねと約束をした。その約束を、これからもずっと守って、実現していこうと心の中で決めた。

延暦寺の根本中堂のお坊さんの話によると、あの有名な万年不滅の法灯は、光が何千年続いてきたが、消えそうになった時期も何度もあったそうだ。光が消えないように、大事に守り、芯をのぼしていかなければならない。築いてきた絆も同じだ。大事にしなければなら

い。そして絆から花が咲き、友情の香りがもっと、もっと広がってくれればいいなと思っている。

訪日感想



李 春洋

東北財経大学 日本語学科3年

(原文中国語)

東京の雰囲気

日本の地に足を踏み入れたときどんな気持ちになることか、と数え切れないほど想像したことがあります。しかし本当に日本を訪れてみると、想像したようには感動も陶酔もしていないことに気づきました。後で思えば、最初の目的地が東京だったからかもしれません。

東京は国際的大都市に恥じない街で、銀座の街頭をそぞろ歩きしていると、耳許にあふれるのは意外にも日本語ではなく中国語でした。数え切れないビルに細い通りが狭まれ、大小色とりどりの自動車がひっきりなしで、コンビニにも中国人の学生がアルバイトしていて、街が非常にきれいなことを除くと、あとは国内とそれほど違いませんでした。

東京の市街地に立ち入ったときから、ある種の巨大な圧力を感じました。鉄筋コンクリートで構成された都市で、訪れたことのあるどの町よりも高層建築が多く、大通りも国内の大都市ほど幅がなく、大部分の人々が整然とした身なりで慌ただしく行き交い、表情がないのです。市全体がまるで巨大な影に覆われているかのようなようでした。東京は交通が便利で、気候が穏やかで心地良く、経済が発達していて、多くの美点を持っていることは私も認めます。また一番好きなアニメの聖地秋葉原の所在地でもあります、好きになれません。

都市の風格

国内の都市は千編一律ですが、日本の大都市はそれぞれに鮮明な特徴がありました。東京は国際的な大都市で、高層ビルで統一されていて、少し重苦しい雰囲気を感しました。沖縄は観光都市で、景色が優美で、自然と親しみやすく、また独特な歴史や文化も備え、異国情緒に満ちていました。京都は千年の古都で、高層ビルがなく小さい建物ばかりで古色ただよっており、古典の息吹に満ちていました。大阪は商業都市で、街のレイアウトがやや乱雑ながら活力を放つ街でした。

日本の都市の風景の違いには深く驚かされました。都市はビルが多少は違うだけで千編一律なものと思っていたので、本来それぞれ個性があるものだと日本ですべて初めて気づきました。むしろ、すべての都市がそれぞれ各自の特徴を持つのが正しいと言えますね。

環境保護

日本の都市の環境保護には、本当に感心させられました。大通りや路地が非常に清潔だと

は言えませんが、少なくとも街頭でごみを見かけることはありませんでした。前に学校の作文の授業で環境保護を扱ったとき、先生方から日本の環境保護についていくつか紹介があったので、日本のきれいさに対する印象も多少はありましたが、実際に訪れてみるとやはり日本の街のきれいさと環境保護事業に対する官民の努力には驚きを感じました。

ごみ処理場を見学したとき、説明係は今ごみを処理している埋立処分場が五十年しか使用できないことに何度も言及して、今していることはすべて埋立処分場の使用期限を延長するためだとのことでした。その言葉の中からは切羽詰まった気持ちが感じられました。ごみ処理場の従業員たちは本当に子孫の環境を心配しているのですね。彼らはごみ処理を単なる仕事として扱っているのではなく、使命としているようでした。相手と同じ言語で話をしてこそ本当によやく相手の心の中に話が及ぶと言いますが、説明係の言葉は違う言語ながら心まで届きました。

文化財の保護

他に深い感銘を受けたのは日本の文化財保護の方法に関してです。現在について言うと、私が見てきた中国の文化財はすべてぼろぼろで、時間の痕跡を完全に残しています。しかし日本は違いました。浅草寺、二条城、比叡山延暦寺のどこも、見られたのはおよそ真新しい状態でした。見学したとき、二条城と延暦寺の根本中堂は工事中でした。もとの様子を維持するのと修繕を繰り返すのとどちらの方法が正しくどちらが間違いだと言うことはできませんが、少なくとも文化財に向き合う別の態度と方法に出会いました。

感想文



何 佳佳

福建師範大学 外国語学院 4年

(原文日本語)

この八日間、楽しく過ごすことができ、感謝している。中国人の友達だけでなく、日本人の友達もできてうれしかった。また、今回は東京都、京都府、大阪府、沖縄県、滋賀県を訪問した。自分の目で日本を見て、耳で聞き、大変勉強になった。

20日はごみ処理場を見学し、24日は滋賀県針江生水の郷を見学した。日本人の細やかさやまじめさに驚かされた。自然を守り、資源を再利用するために、ごみの収集からごみの処理までにいろんな工夫をする日本人はすごいなと思った。いい環境を作るためには、みんなで取り組まなければならない。私は日本人が一人一人この意識を持ってしっかり取り組んでいるから、こんなにきれいな国が作られたのではないだろうかと思う。ところで、中国は経済発展させると同時に、環境問題が危惧されている。これからどのように環境を保護するか、日本人のやり方を見習い、自国に合った制度など作ってもいいのではないかと思う。

環境保護は一日ですぐできるものではないが、今から私たち一人一人が力を合わせてしっかり取り組めば我が国はきっとよくなると私は信じている。

そして、21日の午前中には、少子化現象について一将来を担う私たちができることをテーマに日本人の学生と議論して意見を交わした。中国も日本も少子化現象が進行している。討論会を通して、更に日本の事情について理解が深まり、相互理解も深まった。討論会後は、グループ別に日本人の学生と一緒に昼食して、自由行動をした。短い時間だったが、日本人の学生と友達になれてうれしく思う。これからもいい関係を保つように努力したい。

百聞は一見にしかずという言葉がある。この1週間という短い期間で、東京都、京都府、大阪府、沖縄県、滋賀県に行き、日本の風景を見て、日本料理もたくさん食べた。実際に自分の目で見るほうが日本に対しての理解をより深めることができたと思う。日本語のできる私はこれからも日中友好交流の懸け橋として活躍したい。

最後に、日本科学協会の皆様、日本人学生の皆様、中国人の皆様、素晴らしい思い出と一緒に作ってくださり、心から感謝している。

日本のおもてなし



蔡 弋鳴

華東理工大学 日本語学科4年

(原文日本語)

2020年東京オリンピックが近づくにつれて、おもてなしという言葉も最近頻繁に耳にしてきた。日本のおもてなしは何だろう。その答えも人々によって違うだろう。

訪日してから間もなく一週間。この一週間には、旅に撮った写真を楽しんだり、買ったお菓子を味わったりしていた中、わたしもそのおもてなしは何かがわかるようになった。

食べ物の美味しさ

日本料理はただ口で食べるのではなく、目をはじめとする五感でいただいたほうがいいとよく言われているが、今回の旅に通じて、いよいよ拘わりの日本料理を満喫した。延暦寺の精進料理であれ、京都の豆腐料理であれ、いずれも鮮やかな食材を揃え、春の雰囲気彩っていた。小さな料理には職人魂が入っていたのではないだろうか。

また、今回の旅にとっても印象的だったのは針江への訪れであった。琵琶湖のそばに位置した針江という古き良き町には、地元の人々は命を支えてくれた水を大切に使うように暮らしてきた。わたしもその生水という水をいただいた。すっきりとした感じだった。美味しかった。この水で作った料理もきっと美味しいに違いなかった。

食べ物から見られるのは我々の食生活でもあり、我々の自然や周りの環境への態度でもある。細やかなことを大事に、そして活かすことこそ日本料理の神髄ではないだろうか。

景色の美しさ

この旅に恵まれて、今回沖縄までも訪れてきた。東のハワイという美称を持つ沖縄はその青々とした海とふわふわとした砂で毎年世界中の観光客を魅せる。

故郷も海に近いといっても、その暗い色を帯びた海とゴミだらけのビーチはとうてい沖縄と比べられない。

早い朝にカモメの声を聴きながらビーチに沿って散策していた。沖縄は太平洋の真珠のようにキラキラと輝くとわたしも青い海を眺めながら感動した。なぜ観光客が毎年殺到しても沖縄は相変わらずその美しさを保てるのだろうか。そのコツは環境保護にあるかもしれない。

沖縄にはどこへ行っても、ゴミ箱が配置されている。そして、燃えるか燃えないか更に分別される。わたしはほかの海辺のリゾートへ行ったこともあるが、それは観光客が捨てたゴミでその魅力も失ってしまった。けれども、沖縄はもちろん、日本のどの観光地にも殺到してくる観光客に影響されないように、変わらないまいつまでもその魅力で心を打ってくれる。それはそれは、みんなの環境保護に注いだ力と繋いでいると思われる。

美しい景色はたしかに自然に恵まれたものだが、その美を保ち、未来へとずっと輝かせるのは私たちである。

人々の優しさ

旅を有意義にするのは人間だ、とわたしはいつも思っている。この八日間にわたる旅には、わたしは日本科学協会の皆様、日本の大学生と地元の人々に恵まれ、実に忘れられない八日間を過ごした。

日中大学生討論会には、私たちは考えを巡らしたり、意見を交換したり少子化に関して討論していた。後に四名の日本人大学生に渋谷や原宿まで案内していただいた。「中国文化に興味があるから早い朝に起きて、今日やってきたんです。」と言われた時、わたしは感動してやまなかった。わたしも日本文化に興味を持っていたからこそ日本を訪れたのではないだろうか。お互いの文化に興味を持ち、お互いの理解を求め、そして、お互いの橋を築き上げた。日本人の大学生はだれも中国文化に興味を持つとは限らないけれども、少しずつ、お互いに意見をシェアしたりして、両国の民間交流も盛んになれると思っている。

最後の一晚は大阪で過ごしたのだ。淡路駅で道を迷ったわたしは困っていた頃、地元の人には助けてくれた。チケットも買ってくれた。わたしは上海の絵葉書を差し上げた。「あっ、上海ですか。わたしも行ったことある。嬉しい。」そして、別れた。買ってくれたチケットをわたしは大切にしている。

この旅に、輝いた思い出は書き尽くせないほど多かった。一言で言えば、「ありがたい」である。色んな巡り合わせにありがたい気持ちを持っている。ありがとうございます。

★ 笹川杯作文コンクール（4名）

2018年の訪日の感想



史 春艶

合肥学院 日本語学科4年

（原文中国語）

きれいに描かれた方眼のような街が見下ろせたとき、日本に着いたと実感しました。夢にまで見た日本で、八日間の旅が始まったのです。

印象の中の日本は文化や礼儀を重んじる、国民の資質の高い長寿国家ですが、それは教科書で学んだだけの姿です。ちょっと恥ずかしいことに、一衣帯水の隣国で日本語を専攻にしていながらも日本の地を踏んだことがありませんでした。なので作文が入賞し日本での交流に参加できると知ったとき、感動を抑えられませんでした。旅の中のあれこれを想像して、2月19日が来るのを期待しましたのです。

八日間で五つの都市を訪れ、疲れはしましたが、先生が細かく気遣ってくださり、学生のみんと盛り上がりました。皇居と国会議事堂の遊覧、ごみ処理場の見学、中日青年交流会、針江生水の郷の見学、座禅の体験……収穫がたっぷりの旅でした。

収穫一：実際に日本を感じ、日本の魅力を発見できたこと

他の訪日団とは違い、日本のごみ処理場と日本人さえよく知らない針江生水の郷を見学し、沖縄の郷土芸能を鑑賞して座禅の体験もしました。こうしたイベントを通して日本では環境保護が重視されているのだと心の底から感じました。人々は子供の世話をするかのよう郷里を守っていました。ペットボトルでできた帽子、ごみの粒で舗装された道路、魚たちが浄化する水質なんて想像できますか？日本人は資源を最大限に利用するには一体どうすればいいのか、どうするのが環境に一番いいのかを四六時中考えているのです。沖縄の郷土芸能と座禅で日本の多彩な魅力をもっと知ることができました。特に座禅の体験では、足こそ痺れましたが座禅中に悟った道理には深く考えさせられました。座禅はほんの十五分でしたが今後の人生への態度には五十時間五十日、五十年の影響が生じたと思います。

収穫二：同行のよき師よき友

「縁あれば千里を来たりて相会う」という言葉がとても好きですが、まさに縁あってこそ千里を越えて日本で集まったのです。わずか八日間で、さまざまな地域のさまざまな専門知識を学ぶ友達と知り合いました。日本語では「一期一会」とよく言われ、次にいつ会えるか分からなくとも出会えたことを恩に感じるそうですが、この八日間の付き合いは私たち一人ひとりにとって忘れられないものです。この八日間の旅程を細かく手配して下さった先生方の熱意には頭が下がります。さらには人格形成や世渡りなどについて多くのことを教えていただいたことも、とても身になりました。

収穫三：不足に気づき、前向きになれたこと

こんなに多くの優秀な仲間と日本に来てやっと、自分にまだまだ足りないところがあると気づきました。しかし仲間たちに励まされながら、私はゆっくり前へと歩いています。歩幅は小さいかもしれませんが、一步を踏み出したのです。中日青年交流会では勇気をふるって舞台上で発表しましたが、それが第一歩です。大学院の二次試験を控えた自分にとって、優秀な先生と大先輩方は進んでいく道の模範です。彼らが前で道案内をしてくれてこそ、もっと遠くまで行けるのです。別れるとき、先生や仲間たちと北京での再会を約束しました。再会すべく、がんばって進んでいきます。この約束が努力目標の一つになったからです。

私たちは朝の太陽で、活気に満ちており、中日友好の責任を担っていると先生はおっしゃいました。訪日は中国の学生の日本に対する理解を促進するだけでなく、学生個人にとっても絶大な影響を及ぼします。自分自身にとっては、今回の訪日を通して前へと進む動力が得られました。目標に乏しかった自分が前へと進むよう動かしてくれる力です。このたくさんの収穫は言葉にできませんが、今回の経験と収穫は永遠に心にしまっておきたいと思います。常に感謝の心を持ち、人との出会いを大切に、いつでもこの忘れがたい八日間の旅を思い出します。

訪日感想



鄭 羽揚

厦門大学 日本語学科 4年

(原文日本語)

日本から帰国して4日以上も経つというのに、感想がなかなかまとまりません。あまりにも想像を超えた、充実で多彩な8日間だったからです。長かったようで短かったような、たくさんの景色、物、人との出会いで詰められた8日間でした。ですから、一括することは諦めて、一番印象に残ったことをここで書きます。

今回の訪問地のうち、東京以外はすべて初めてでした。どの場所にも新鮮な体験をさせてもらって、忘れがたい思い出になっています。ところが、私が最も感慨深かったのは、やはり東京でした。滞在時間が長かったのもあるが、なによりも訪日団のみなさん、そして日本人の友達と知り合った、訪日の始まりである場所は東京だったからです。

一回目の東京は母と、二回目は自分一人で回っていたのですが、どうしても観光客気分できて、東京の上っ面しか見えていませんでした。そして、「どこの国にでもあるような大都会」としか思っていないませんでした。しかし、今回は訪日団の皆さんと、日本の若者たちと東京を歩いていたら、なぜか親しみが湧いて、自分とこの町は繋がっていると感ずることがで

きました。例え同じ東京タワーでも、母と見たときはただの観光スポットであって、写真を撮ってあれば十分でしたが、訪日団の友達と行ったときは、それぞれの日本への思いを語り合って、タワーも前より輝いているように見えました。日本人と登ったときは、東京の風景を紹介してもらって、一緒に富士山を探して、私はまるで自分の住む場所のように東京をもっと知りたいと思いました。日常的な街や公園でさえも、違う人と一緒に見ると見えるものも変わったのです。

私は人と接するのがあまり得意ではないのです。行く前は、40人以上と団体行動しなければと考えると、不安でなりませんでした。堅苦しい正式な訪問だと想像してしまいました。幸い、訪日期间に出会った人々はみな優しくかったです。そのおかげで今回の訪日は行く先々に、優しい風景を見ることができました。このような思い出や人との絆は必ず今後、私の世界のとらえ方を変えていくのに違いありません。

忘れられない「旅行」



王 珺

華中師範大学 外国語学院日本語学科3年

(原文中国語)

「私と日本」という文章があるので、ここから日本の旅を語れます。何も見えない中で縁がこういうものだとは言えません。

去年十月、笹川杯「感知日本」作文コンクールがあると知って、試しに応募してみるぐらいの気持ちで投稿したところ、千作品ほどの中から入選したことは本当にとっても幸運です。このコンクールの賞品は、大学生日本知識大会、「本で味わう日本」作文コンクール、日本研究論文コンクールの入賞者と日本へ八日間の研修に行けるというものでした。

この八日間に、相前後して東京、沖縄、京都、大阪などへ行きました。東京の街の国際的都市の風情を実感し、沖縄本島のロマンを味わって、京都の歴史の古風な良さを体験し、大阪の人々の律義さと人情味の厚さを感じ取りました。見ると毎日すべて数万歩の記録があり、たくさんの優秀な仲間たちに囲まれ、本当に充実した熱い八日間を感じました。数えてみると今回が初めての外国で、初めての日本です。行った甲斐がある、というのが心からの感銘です。

日本に着いた初日は皇居と「東京で必ず行くところ」銀座を見学し、夜には人によっていろいろ言われる河豚料理を体験しました。どうしても今回の活動を主催された先生方の思いやりに言及せずにはいられません。初日は中国では旧正月の十五日ですが、日本にはその祝日がありません。先生方は細かく気を遣って元宵団子と似た大福を用意し、こんなに多くの新しい友達と一緒に元宵節を過ごさせてくださいました。本当にとっても特別な祝

日でした。

翌日は江戸川区のごみ処理場を見学しました。日本のごみ処理は分類が入念で、物の効用を十分に発揮させ、資源は最大限に回収し再利用するとは前からうわさに聞いていました。今回の見学でその感覚が深まりました。我が国はごみ処理の面で確かに日本より多くの不足が存在すると言わざるを得ません。国の奨励政策、住民の協力し参与する度合、いずれもきわめて重要な要素ですが、住民との意思の統一がとりわけ重要だと思えます。大量の労働コストを節約できるだけでなく、さらに関連政策を順調に推進でき、同様に工場では資源とコストの節約にもなり、要するに社会の各方面の資源を十分に利用できるの、きっと学んで参考とする価値があります。その後は国会議事堂を見学しました。日本の政府機関の機能について理解を深められました。

三日目は本当に今回の日本の旅で収穫の最も大きかった一日です。午前。日本の多くの大学から参加した90人の学生とテーマ討論しました。今や少子化の問題は多くの国が直面する社会問題となっています。四時間の討論で、それぞれの角度から社会の原因を分析し、対応する解決案を出しました。熟しているとは言えない考えがいくらかあったものの、日本の大学生の態度、問題を考える出発点と着眼点、社会で注目されている問題の把握、専門以外の分野に対する理解度、個人の表現力などを痛切に認識し、彼らの優位を理解して、自分の不足も知りました。お相手をするうち、みんなが日本の友達と大いに歓談できるようにもなりました。午後は別のチームで日本の仲間と東京をそぞろ歩きしました。午後の付き合いで、日本のパートナーと交流する機会が増えました。多くの日本の学友も積極的に中国語を学んでいました。チームの責任者が晩餐会でみんなに中国料理を提供し、日本の学友は同様に中華料理の広さと深さを感じ取っていました。しかし中国料理の料理名は彼らにとって大きい挑戦だったようです。

四日目は東京を離れ、日本最南部の島で「東方のハワイ」と称えられる沖縄へ向かいしました。第二次世界戦争中に日本で唯一、米軍との陸戦があった小島です。戦争の傷のためいっそう平和を見張るようになった島で、人類の平和に対する追求はどこでも同じです。その後、中国との縁がすこぶる深い首里城を見学しました。前身は中国と密な往来のあった琉球王国です。建物、服飾、飲食などの面で中国の伝統文化の影響を深く受けています。

五日目は京都に行きました。聖地巡礼と伝えられる、歴史ある古風で質朴な都市です。日本の寺院の文化を体験して、竜安寺、延暦寺を見学しました。そして延暦寺で日本の座禅文化を味わいました。

六日目は滋賀県の針江生水の郷に行きました。日本の農村に間近で触れ、日本の資源に対する十分に持続可能な利用を身をもって経験しました。生態系の保護、循環利用の理念と技術は、各家庭に深く入り込んでいるだけでなく、住民自らが実践していました。日本だけでなく、他の国や地域も学び見習うべきことです。続いては西陣織会館で和服の実演を鑑賞し、和服の歴史と製作、そして日本国民の和服に対する信仰を深く理解しました。

七日目は、繁栄している大阪に行きました。繁栄していながら東京とは異なる繁栄の様子でした。初めて自分で日本の電車を体験しました。きっと一生忘れ難い経験です。乗り過ぎたり反対側に乗ったり、まったくばつが悪い状況でしたが、居合わせた大阪の人々が親切で、一心に方向を教えてくれて、自ら道案内をしてくれる人までいたので、本当にとても感動しました。その後さらに百年の歴史を持つ造り酒屋を見学し、伏見稲荷神社で神社文化を体験しました。

いつの間にか、すでに八日目でした。時間はいつもあまりに速く、つかまえておけません。であるからには、歩いた都市、道中の景色、通りがかった人を、記憶の中に入れておきます。訪れたときの興奮、離れるときの名残惜しさ、見聞は心に刻むだけにして、未来を胸中にしまって、引き続き前へ行きます。

以前の教科書の中の日本、他の人から聞いた日本、雑文や旅行記の中の日本はどれも、自ら体験した日本にはかないません。日本の社会や人文、自然の生態、日本を感じ、さらに日本に入らなければなりません。

最後に、日本に対する理解を深めるこの機会をくださった日本科学協会と人民中国雑誌社に感謝しています。今回の日本の旅に基づいて、小さい提案があるので、先生方にご参考いただければと思います。この活動の中で、実は日本を訪れたことのある学生が多いことを知りました。日程には行ったことがある場所もかなりあったと思います。前もってちょっとした調査を行い、グループごとに行程を変えれば、もっと良く日本を体験できるのではないのでしょうか。

時間は慌ただしくて、瞬く間に去ってしまいます。チームの先生や友人たちがそれぞれの場所で過ごせればと思うだけです。



孫 斌

浙江中医薬大学 濱江学院漢方薬専攻 4年

(原文中国語)

日本科学協会と日本財団の皆様の温かなおもてなしに感謝申し上げます。この8日間で東京、沖縄、滋賀、京都、大阪などを訪れ、多くは普通の旅行では行けないような所でした。また、多くの同年代の日本人の方と交流でき、刺激を至る所で受けました。

今回は二回目の訪日ですが、一回目とは異なり、様々な事を考え、感じる旅となりました。美味しいフブ料理、美しい海辺での珊瑚の苗植え体験、延暦寺での座禅修行。これら全てが僕にとって全く新しい体験でした。

今回の旅行を通して、交流と理解の大切さを知りました。8日間という短いスケジュールでしたが、新しくできた日本人の友人との友情は永遠に輝きつづけることと思います。

そう考えると、この8日間の旅がどれだけ非凡な意味を持っているか分かります。人生の中で、このような忘れがたい時にどれ位巡り会えるでしょうか。この8日間で経験したものは、僕にとって何ものにも変えがたい財産であり、それは沖縄で植えた小さな珊瑚の苗と同じで、今は目立ちもしますが、10年、20年経った後、必ず素晴らしい輝きを放つと思います。

★笹川杯日本研究論文コンクール（3名）

2018 笹川杯日本研究論文コンクールの訪日の感想



左 華芸

北京師範大学 日本語学部4年

（原文中国語）

冬休みの終わり、笹川杯日本研究論文コンクールの特等賞の受賞者として、本学の林涛先生の引率で、他二人の受賞者ともども日本での交流活動に参加しました。今回の活動は収穫でいっぱいの旅でした。自分の足でよく知らない土地を測量し、脳で異国の思想や文化と火花を散らし、耳で本場の日本語と先生の親切な解説に耳を傾け、心で日本の国民の強烈な環境保護意識、危機意識を悟って、延暦寺に伝わる深遠な禅の心を感じました。

全体の旅の中で多くの場所を訪問し、多くの名所を遊覧して、また先生、学友たちとの交流で多くを学びました。東京では江戸川清掃工場を見学して、日本の先進的な環境保護施設に賛嘆すると同時に、中国のごみ処理の現状を改めて考えさせられました。試みに、いくつかの貴重な経験を総括します。最初に説明係の紹介を聞いたときは、映像と画像を見ただけで、実際のごみ処理の場面がどんな規模なのかを感じられませんでした。実際に見学エリアに立ち入ってガラス越しに巨大な機械や複雑な計器を見たとき、深く揺り動かされたように感じ、ふと自国でどのようにごみ処理が行われているのかさえ知らないことに気づきました。日本のごみ処理場が五十年後の埋め立て地の心配をしているとき、中国のごみ処理場は何をしているのでしょうか？日本の十分に整ったごみ処理体系が動員しなければならない人力と物資は以前の私には想像しにくく、行政が支持し国民の意識に感化される変化がなければ実現しにくいでしょうが、中国はこの領域でとても長い探求の努力が必要で、日本の経験は十分に貴重なはずで。

訪日の三日目、優秀な中国、日本の青年と両国共通の社会問題、少子化の高齢化を討論する機会に恵まれました。同じチームの日本人は全員女子学生だったので、現在の日本の若い女性の結婚出産に対する見方を割と全面的に知ることができました。討論の中で、大部分の

日本の女性はやはり結婚して子供をつくることを渴望していることが分かりました。ただ就業の不安定さと保育園の不足のため、日本の女性が日に日に独立する傾向により、結婚という選択がますます慎重になり萎縮しているのです。中国の大都市、特に北京では住宅価格のレベルが中国の若い人の出産を制限するとともに大きい要因で、また中国人に昔からある息子の出世を願う観念も多く、多くの家長に子育ての圧力を大きく感じさせています。これらは日本の学生が思い付いていなかったことです。討論全体で互いに対する理解が深まり、両国に共通する問題がたくさん見つかったので、多くの利益が得られました。その後は一緒に東京で遊び、一日の共に楽しむ時間を通して、深い友情を結びました。

それからの日程では日本のさまざまな文化を訪ねました。沖縄では真っ青な海を眺め、砂浜ではしゃいで、さんご畑に行き自分の手で小さいサンゴを植えつけ、海底により多く盛んな生命力をもたらせるよう祈りました。京都では神社や古刹を遊覧して、日本の宗教文化を体験しました。伏見稲荷大社の千本鳥居をくぐり抜け、龍安寺の枯山水から十五個目の石を探して、延暦寺の座禅の静謐さの中で未知の自我を訪ね・・・日本文化の大自然に対する崇敬とひっそりと静まり返った無限の変化へのあこがれは深く印象に残っています。

この活動で一番うれしかったのは、多くの優秀な先生や仲間たちと知り合えたことです。慶応大学を見学したときには中国文学が専門の教授にまでお目にかかれました。多くの大学の先生や学生たちとの交流の中で、日本語の研究者、学者は尊敬でき、けなげだと感じ、自分もますますグローバル化していく世界のために尽力する大家族の一員であるかのように感じました。また、今回の訪日がこのように首尾良くすばらしくなったのは、日本科学協会の顧先生、孔先生を代表とする引率の先生方のお気遣いご尽力とは切り離せません。先生方は夜中までスケジュールを企画してくださり、何事も配慮が行き届いていました。この場で改めて感謝を申し上げます！この旅での収穫と悟りを胸に、今後の学習、仕事や生活を続けて行き、自分の日本語のレベルと研究能力をさらに高めて、できる限り中日の友好交流に貢献したいと思います。

日本を訪れての交流活動の感想



胡楠

北京外国語大学 日本語学部4年

(原文中国語)

このたび日本科学協会、日本財団の企画による日本での8日間の交流活動ができたことはとても光栄です。ごく短い8日間ですが、多すぎる一生忘れ難い思い出をくれました。

前にも何度か日本を訪れていて、あまつさえ東京に一年留学したこともあります。今回の交流活動での三日間の東京の旅は以前のどの観光とも異なるものでした。まず、見学スポット皇居と国会議事堂から主催側の苦心が並大抵でないことが感じられます。若者があこがれるにぎやかな東京ではなく、しかし別の面から完璧に東京を代表するスポットでした。この二箇所を見学するのは自分も初めてで、その中からモダンな東京の背後にはもっと蘊蓄に富んでもっと趣がある東京があるのを感じました。

もちろん、東京での三日間の中では日本の学生と討論交流会をした日の印象が一番です。各チーム内では中国の学生が日本の学生より少なく、そうした討論に参加したこともなかったため、始まる前は興奮したほか少し緊張もしていました。しかし本当に討論のプロセスに入った後は、日本の学生たちが積極的に屈託なく案内し協力してくれて、みんなのおしゃべりが一気に開放されました。筋道たててはつきり政治、経済などの面から少子化問題について探求しただけではなく、もっと重要なのは日本の若者のキャリアプラン、人生の追求に対する考えを知ったことです。またこの討論会を通じて自身が体得したのは、内心の「型通りの印象」は多くの場合さほど正確ではないということです。私たちは日本の女の子の専業主婦に対するあこがれを仮定していましたが、今の日本の女子学生が結婚、仕事についての態度をとくに転換しているとは知りませんでした。彼らは中国の子供が家庭の観念が強いため結婚して子供をもうけることに対して渴望を感じると仮定したようですが、実際の中国社会の中の生活のプレッシャー見ただけでしり込みしてしまうものであることを知らなかったようです。こうした「誤解」はニュースを見てもラジオを聞いても分からないので、顔と顔を向き合わせた交流をしなければ体得できません。青年の間の相互の理解と尊重は、国と国の良好な関係の最も重要な保障なのではないでしょうか？

午後の日本の学生との東京観光も非常に有意義でした。道中は日本の友達と絶えずぺちやくちゃ雑談して、大きくは国の制度や文化、小さくは学内のイベントまで、何でも話しました。原宿のかわいいアイスクリームショップで一緒にセルフィーを撮り、都庁の展望台で夜景を見ました。明治神宮の青々と生い茂る杜とあまりにもにぎやかな渋谷の交差点も歩きました。わずか数時間で私たちの関係がヒートアップしたのです。この縁、この感情は、いつの日本自由旅行でも得られなかった無上の宝です。

東京での日程を終え、今度は沖縄を訪れました。長いことあこがれてきた南国の小島を訪日交流の日程に思いがけず見つけたときには、本当にすごく驚喜しました。二日間は沖縄の天気も非常に協力して、美しい海にとってもすばらしい舞台をあつらえてくれました。沖縄の旅と言えばどうしてもANAのリゾートホテルです。本当に貴重で独特な体験でした。沖縄舞踊の観賞とサンゴ養殖の見学には改めて主催側の入念で非常に細かい日程の手配、並大抵でない苦心が感じ取れました。学生に普通の観光旅行では体得しきれない日本の特色を体得させようという配慮です。

「日本の特色」に話が及ぶと、どうしても京都での座禅体験は外せません。静寂な比叡山の中、日本の僧侶に従って座禅を体験することができたのは、日本の旅全体の中で感動の最も深い日程に挙げるべきものです。以前にも「瞑想」という精神療法に接触したことはありますが、ぐずぐずして行動に移すことができませんでした。今回は僧侶の説明や指導を耳にすることができる機会があっただけでなく、実際に体験することもできて、完全に新たな世界の門を開くことができました。先生が言うように、座禅をするとき思考が遠ざかっているかを判定する必要はなく、受け入れることだけが必要なのです。生活で試練に出会ったとき、多くの場合は焦って手を打てない自分を評価し、批判さえすることもあります。しかし実は方法を変えて、自然に受け入れたほうがよいのでは？座禅は心を修復します。抜け出して本当の自分を見た後、頭を下げると禅室の中で感激の涙があふれました。主催側の細やかな配慮に改めて感謝します。日本の宗教文化を体得できただけではなく、もっと重要なことに、真の自分を見ることができました。

まる8日間の旅で、記録に値する感動はたくさんあります。先生方やガイドさんたち努めて自ら動いてくれたこと、貴重で高価なおいしい食べ物や珍味、日本財団理事長の激励の言葉、同行した友達と仲良くなれたこと……どれもがかけがえのない宝物です。

心は感謝と感動だけでなく、期待がもっといっぱいです。また会えることへの期待！

訪日後のちょっとした感想



王 紫玉

大連民族大学 日本語学部4年

(原文中国語)

訪日団の旅行を終えて二日になりますが、まだみんなと過ごした時間に浸っています。今回の旅行では東京を大通りから路地まで見て回り、沖縄では小さいサンゴを植えて、京都では止観座禅を体験し、大阪の神社ではお祈り・・・そうした場面が素敵すぎて再三回想することを我慢できません。

しかし美しい景色よりも感動したのは随行した先生の立ち居振舞いです。本当に仕事に参加するとはどのようなことを示してくれました。自分の本職の仕事をしっかりと行うと同時に回りの人に対する配慮も保たなければならず、どんな状況でも手抜きなく周到的な配慮をしてくれていました。それが今回の旅行の中から得た最大の収穫です。将来、仕事に加わって社会に出たら、私も先生方のように仕事熱心で優しさもある人になろうと思います。

針江を見学したとき、解説してくれたおじいさんの誇らしい語気が長い間忘れられずに

います。こんなに多忙な現実の時代に、まだこだわりのある人がいて、家長のために無償で奉仕しているとは、ただみんなに環境保護の利益を理解させるため、村民に小動物達と調和がとれた付き合いをさせるためだけにとは想像しにくいものです。自分の好きなことをして他の人の仕事を助けられるのは確かに幸せなことです。将来のキャリアプランとライフプランを考え直そうと思われました。

今回の旅行では中日の友好のために黙々として貢献する多くの人に会い、中国文化を好む日本の仲間にもたくさん会えたので、未来の中日関係に対して自信に満ちています。また、後日この仲間たちともっと交流できればと思います。志を変えずこの道を歩き続けさえすれば、きっとまた顔を合わせられるでしょう！

★本を味わい日本を知る作文コンクール（6名）

春の朝の虹序曲



喬 暢 天津外国語大学 国際伝媒学院漢語言文学3年

（原文中国語）

日本は現代と伝統の融合した国で、その静謐さと喧騒、新鋭としなやかな美しさは、東京銀座のにぎやかな夜を行き交う船のように日本の印象を織りなし引き立たせ合っています。川端康成は「春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえて冷しかりけり」という和歌で日本の四季の明らかな美しさを形容していますが、私は早春の時節、虹の美学に出会いました。

虹がはるか遠く光り輝く風物の美との出会い

人口二千万の東京都は、上品さと蘊蓄に富んでいるうえ、「庶民の美しい娘」のような緻密さもいっぱいです。にぎやかでも騒ぎ立てず、目立つ人は王冠のよう、控えめな人は隠者のようで。詩のように光り輝き、夢のように彩り豊かで美しい。春秋を切り取った一面の晴れた空の美しさ。上野の日差しの中で一筋の真っ赤な軽い雲を放ち、煙雲が立ちこめるお台場の明月の中にすこぶる美しいレインボーブリッジの恋を展開していました。

振り返った軒先の重なる高殿、白い壁に黒い瓦、皇居は青々と生い茂る林と庭の深い所で見え隠れ。春の朝の虹の旅はここから始まりました。素朴な心で、お堀とコントラストをなして威厳がある二重橋を見ると、霧と橋が入り乱れて輝いて、鳥が風向き次第で飛来し、水中では錦鯉が泳ぎ回っていました。北の丸公園は何本か早咲きの桜が彩り、皇居前広場は常緑樹に見守られていて、厳かでも品を失わないたたずまいでした。

京都では二条城に歩み入ると、足もとの床板が一步進むごとに鸞（霊鳥）の鳴くような音を立てました。御殿内の障壁画にはさまざまな風物が盛り込まれていました。清新で喜ばしい桜花雉子図、雄壮な竹林群虎図、力強く鋭さのある松鷹図、そして静かではるかに遠い山水画があり、こうした生き生きとした図画を見ると思わずかつての繁栄と輝きを回想してしまいます。時代の隆盛と没落を見つめてきた二条城が歴史の舞台から退いて230年が経とうとも、無数の精妙で並み外れた絵画や優れた彫刻がまばゆい彩りを保たせています。

那覇の首里城は広大で深紅に染まっていた。精巧な木造建築は沖縄の歴史の変転を物語っており、耳のそばでは琉球楽の音がこだまして、まるで華麗な王朝の文化を述べているようでした。高山流水に従って、康熙帝の揮毫された「中山世土」の扁額を見て、繁栄していた琉球王国が中華文明の血脈と互いに頼る歴史の景観に思いを馳せました。アザナに上がって、城壁の上から那覇市街地の風景を見下ろすと、目の及ぶ限り、天を突くばかりにそびえる摩天楼がなく、明るい色の建物がずらりと並んでいて、遠くから吹いて来る海風はほんのり塩気が混じっているようでした。目を開けて遠くを眺めると、雲の奥に見える山並みは木が生い茂っていて、霞や霧に閉ざされていながら、しなやかで美しいその姿はよく変わっていました。

対馬暖流が絶えず赤道の温かい海水を琉球諸島へと運び、暖流の影響により四季を通して緑の沖縄は、のどかな暖かい陽になでられています。早春の新緑、峡谷に沿って散歩する小道は青い光芒のきらめく虹の水まで延び、日光の下で少女らがスカートの裾を舞わせ、海風を吸って、日光を浴びている様子は、まるで光合成をしているようでした。夕日が西に沈んでから、岩の入り組んだ残波岬に近寄り、沖縄北西部の海岸線を見下ろすと、曲折がしなやかで美しく、夕焼けの余韻を伴う岬全体が一望に収まりました。

虹の俗世から超越した美との出会い

「さびしさや一尺消えてゆくほたる」と立花北枝が詠んだ瞬く間に消えてしまう光芒からは奥深く静かな禅意が伝わって来ます。それは日本ならではの「さび」です。京都ではしばらくリズムの速い近代的な生活を離れて、静寂で深い境地を体得し、古都独特の魅力を感じ取り、近代的なリズムの中で伝統色の輝きがどう再現されているのか探りました。

比叡山では道を悟り、松尾芭蕉の生命観を得ました。一生全国を遍歴した芭蕉は山水の間を放浪して俳句の第一人者となり、やましいことがなく、師や友人を訪ねては、道中で歌い泣き、詠み嘆き、豊かな心、崇高な情操で心の中の悲憤を情緒的に描写しました。お寺で静座する間は、俗世間の雑念を手放し、人生を回顧して、自己を点検し、過去を反省して、未

来を悟り、ふと全く新しい自分と情趣の満ちあふれている自然の伴侶に気づいたので、春に「月は夜空を歩き、手のひらに桜散る」などと書くような落ち着きがあったのでしょうか。

伏見稲荷大社では、青竹の柄杓で自然の流水を汲んで両手を流し、鉛白を洗って、澄んだ心で厳肅な殿堂に立ち入りました。朱色の鳥居が稲荷山の山頂まで連綿と続き、深い所へ行くと霧が漂っていて、たくましいモミと低く垂れこめる深緑の木の枝がコントラストをなして風情がありました。千本鳥居の不思議な赤い微かな光の中を歩いていると、ぼんやりする間にすべてが静謐で神聖だと感じ、ふと顔真卿の「俗ならざれば即ち仙骨」の奥深さを悟りました。

龍安寺では「簡素」と「禅」が互いに結合して、日本の古典的美学の「さび」が託されていました。「枯山水」の景観は外在する修飾と彫刻がそれほどないのですが、その意味するところは「道」を守り、世界を騒がせることなく、内心の無限な満足を追求すること。石で山並みを、白沙で湖や海を、砂の紋様で波を象徴して、山も水もないのに幾山河をほのめかします。ここを散策すると、沈黙の中に激流や険しい石を感じ取り、多くの川が海に流れ込む独特な生命の体験ができます。

虹の清く質朴な人文の美との出会い

日本民族の感情の繊細さ、比類ない精神の宝です。より調和がとれた自然の生命を探求し続け、心の奥深くの情緒を直観的に捉え、自然の移ろいを観察していて、我が身のように人の生死の宿命と喜怒哀楽を味わうのです。転々として絶えず変わる人生観とわびさびの審美観を大自然に溶け込ませ、人生を春夏秋冬の自然が入れ替わる道に置いて、物我を忘れ去って大自然との息が合う付き合いを人生最高の精神の境界とし、平凡な生活の趣の中からすばらしい宇宙と生活の真の意味を悟ることができます。

人文を感知すると、景物の風格と趣をもっと良く味わうことができます。滋賀県の生水の郷では、人と自然の調和した共生をはっきりと味わいました。日光は動いていて顔を出すもの、水は流れ、船を支えるもの。山と川の贈り物である澄みきった水は何世代も村人を養い、人も生き生きしています。当地では旅人だけでなく、朝霧、シラサギ、雲も互いに引き立て合っています。流水と小橋、壁にまだらについた泥、小さい建物が建てられて以来の清さと暖かさ。戸口では鯉が竜門に飛び込み、水中ではバイカモが自由に舞っています。松の枝は低く垂れこめ、木の姿はしなやかで美しく、小道は静寂。人々は水に従って住み、水を動かして暮らしており、すべてが静かで落ち着いて見えます。

日本は温かい国です。ここで私は人生の中で偶然に出会った友情と、とても貴重な思い出を得られました。日本の仲間たちとの距離は山海をまたがり越えるものですが、感情に境界

線はないと信じています。いわゆる「最もすばらしい場所」とは「来たら離れたくなくなる」ところだと思いますが、日本はまさにそうです。日本の余韻は心の中で満開です。道中の景色とともに帰路つき、この「春の朝の物語」の余韻が長いことを望むばかりです。

訪日感想



王 恩澤

大連海事大学 船舶 海洋工学 2年

(原文中国語)

まず、今回の訪日団に参加できたことは自分にとってとても幸運だと感じています。そして今回の活動に貢献してくださった一人ひとりに心から感謝を申し上げます。

総じて、日本は大多数の中国人にとってなじみがあると同時によく知らない国です。なじみがあるのはとても明らかで、日本から輸出される文化や商品は中国人、特に若者に対して深い印象を残しています。また、歴史書にも中日交流の歴史は千年余りとあるので、日本は中国との接触が特に多い国だと言えます。しかし自分の知っている範囲では、つまり身の回りの人とネット上で触れる言論を含め、日本についての評価が不思議千万なのです。誇張に見えるほどの賛美もあり、辛辣すぎるような評価もあって、日本は大したことはないと思っている人もいれば、いつも日本を陰謀論と紐付けるような人もいます。こうした言論はかなりの割合を占めていますが、事実上、圧倒的多数の人は外国に行ったことがないので、どの説にしても当てにならないというわさの要素が結構あるのです。なのでよく知らないというのも妥当です。

俗に百聞は一見にしかずと言われます。自分も日本を訪れる前には日本に対してあれこれ憶測していましたが、一週間ちょっとの観察の中で、日本に対してもっと全面的で客観的な認識ができました。以下では直感的な感想、中日の対比、現状と未来に対する考えの三つに分けて、簡単に感想を述べます。(ざっくりと分けただけなので、内容が交差する可能性もあります)

直感的な感想

一番に受けた感銘は、日本はアジアの先進国に恥じないということです。国土の面積は決して大きいとは言えないものの、都市にも田舎にも緻密さと秩序が伺えます。ごみ処理などの行政サービスも秩序だで行われており、使い勝手よくデザインされた道具もあります。北京、上海、モスクワなどの都市にも行ったことがあり、中国の農村にも何度か行っていますが、ある地域から緻密という印象を受けたのはやはりこれが初めてです。

東京滞在中は三日とも夜に出かけ、散歩したり地下鉄や電車でちょっとした見物などを

していました。日本は古典と現代文明の融合が割とうまく行っている国だと感じました。高くそびえるスカイツリーのすぐそばに古風で質朴な浅草寺があり、電車でも和服姿のおばあさんを見かけることができました。こうした融合も、緻密さを感じる理由だと思います。

次に感じたのは日本の製造業とサービス業のレベルです。銀座でも心齋橋でも、中国の顧客の声を耳にしました。出国前にもある程度はうわさに聞いていた現象ですが、中国人が日本製品を認めていることの現れだと思います。日本での数日間、サービススタッフの態度が我が国と比べて全体的に良いように感じました。

まとめると、この数日で見えたものにより、日本に対するいくつかの型通りの印象が消えました。比較的リアルな日本を見られたのだと思います。

中日の対比

両国の最大の違いに言及するとしたら、上でも述べたように、文化の融合のしかただと思います。中日両国の文明体系は全世界の範囲内では比較的近いと言うべきものです。しかし中国は今まさに文化の復興する段階にあります。例えば、中国は決して伝統衣装がないわけではないのに、多くの場合は若者のおもちゃになっていて正式な服装ではありません。また、若者が漢服を進んで身につけてもただ着るだけのレベルにとどまり、関連する儀礼と知識をしっかりと知ることはありません。

文化のほか、資源の回収利用にも違いが現れていました。東京では江戸川区のごみ処理場を見学しましたが、工学を学んでいる自分にとっては賛嘆に値する処理の流れでした。エネルギーの利用率と物質の利用率を高める機構で、社会全体にとってきわめて高い経済価値があります。

中国のごみ処理場を見学したことはありませんが、知る限りでは第一歩のごみの分類がきちんとできていません。家庭ごみも公共施設でのごみも適当に同じごみ箱へ捨てられています。明らかに、資源回収の面ではとても大きい学習と進歩の余地があります。

また抽象的で日本人自身も意識していないかもしれない点もあります。日本では全体的に人と人の間の空間がとても尊重されていると思うのです。主に買い物をするとき気づいたのですが、日本ではお店の大きさにかかわらず、店員を見かけることが中国よりかなり少ない気がするのは主観に過ぎるかもしれませんが、実際の感覚としてそうでした。

ほかにも細かいことはあれこれあるので簡単に列挙してみます。日本のお年寄りも中国のお年寄りよりも元気に見えます。社会の労働力が減っていることと関係があるかもしれませんが、この点ではどちらがよいとも言えません。結局のところ国情との関係がとても大きいからです。日本の消費材、特に食品の価格はとても高く、日本の収入と比較すれば適しているとは言え、他国通貨に換算すると高く見えます。たくさんの経済上の問題に関わることなので多くは論じませんが、総じて日本は先進国であり、中国が学ばなければならない面がありますが、中国にはない困難もあります。両国がお互いを参考に学習できればと思います。

現状についての考え

東京の地下鉄でとてもおもしろいディテールに気づきました。東京の地下鉄では一部の画面に国際ニュースが表示されていたのです。目にしたときは中国に対する報道が大部分を占めており、関心や焦りが言葉の上に見えました。後で本屋に行きさっと見たところ、社会科学類の記事には国際政治を論じた書籍も多く、中日関係を競争性の関係と見なすか、中日両国の利益を対立する位置に置く論調が多くありました。そのほか、今の日本は米国との政治上の付き合いが非常に頻繁ながら、依然としてリアルタイムの本から現状に対する疑問が見られ、沖縄では県民投票で米軍の新基地建設に反対する様子を目にしました。政治上の問題は複雑に入り混じっていますが、歴史の観点から、誰もが不必要なたちの悪い競争を友好的な関係で克服したいと願っています。

したがって、私が希望する未来は、中日など東アジアの国々がEUのように団結した組織を作り上げることです。文化上の源を同じくしており、千年の交流の歴史は欧米諸国間の交流の歴史に少しも見劣りがしないからです。また、両国が将来、手を携えていってもっと多くの問題に対処し、共に世界の歴史を書いて、全人類に幸福をもたらせればと思います。

見たこと思ったことが非常に多く、また筆力もないため、言っていることが分からない点をご寛恕ください。

訪日感想



劉 昊昕 山東大学（威海） 計算機科学 技術 3年

（原文中国語）

この8日間の交流は本当に素晴らしい、完璧と言えるものでした。何も不満はないので、一番よかった活動ともっと体験したいものについてだけ述べたいと思います。

- 1 本当にうれしかったのは日本の学生との交流です。とても楽しく、活動全体で一番忘れられないものです。
- 2 当初は交流の要素がもっと多いのかと予想していました。本当に貴重な機会なので、もっと交流できる場面があればと思います。日本語を専攻していない学生にとって、旅行にも吸引力はありますが、同い年の学生との交流のほうがより多くを知ることができ、またとないい機会です。中日の学生が共に中日双方の先生から講義を受ける、双方の学生が共同して何か完成させる試合といった交流がもっとあればと思います。どちらの内容も期待しています。
- 3 みんなでバッジや記念シャツを作れるといいなと思います。別れの時は本当に名残惜しかったので、そうした記念するシンボルが欲しいです。

4 毎年の訪日団のメンバーと日本の学生を含めたもっと大きなグループが作れたらと思います。メンバー専門のサイトを作ってもいいと思います。そうするとプロジェクトの求心力が向上し、みんなが気に入ってくれます。以前の参加者も新しい進展を見たいでしょうし、各地で活動に参加した両国の仲間と連絡を取れるようになります。たとえば自分は就職したらこのプロジェクトに募金して力になりたいと思っています。この方法を通じてならばきっとどれも実現できると思います。同窓生と会うような感じで。

5 訪日団のメンバーはやはり日本語学科の学生が絶対的多数だと感じました。きっと正しくて必然なことなのでしょう。日本語を専攻していない学生のチャンスももうちょっと拡大できたらと思います。日本語を専攻する学生のほうが日本で交流や留学する機会は多く、他の専攻だと少ないので、一面的な理解にとどまることすらあります。自分自身を例にとると、日本語はまったくできなくても、初めての日本旅行で本当に日本に対する印象が覆りました。他の専攻の学生のチャンスを拡大するのは価値があることだと思います。

6 理解を深めるため一箇所での滞在時間がもっと長かったらと思います。団体旅行にはないチャンスですし、日本の文化をもっとじっくり感じ取れます。

7 先生方の手配は本当によかったと思います。一番しておきたい提案は、団体旅行ではできないことをもっともっと体験できるようにです。水郷やごみ処理場の見学、学生との交流、古刹体験など、それはそれは印象に残っています。

沖縄の美しい万座ビーチは後で稼げばまだ行けますが、日本の文化をじっくり感じ取って深く理解できるものはそうはいきません。

先生方には本当に感謝しております。帰ってきてこのかた少し気落ちして、あまりにすばらしい経験を思い出すと言葉に出来ない苦しさがあります。

この活動がもっとよいものになりますように。自分は日本語の学習に努め、10月の北京では日本語で手伝いができるよう目指します。

海に囲まれた国の旅



俞 奕如

寧波大学 中文学部漢語言文学3年

(原文中国語)

ベランダの外で連綿と続く雨を眺めていると、思わず沖縄の海と日差しを偲んでしまいます。帰国して五日目でもまだ旅行状態から抜け出せず、東方の海に囲まれた国で残した足跡と記憶を回想してばかりいます。

にぎやかで忙しい東京と静謐で落ち着いている京都からはかの国の多面的な印象を受けました。まして滋賀県のような安寧な田舎、独特の特徴がある沖縄はなおさらです。一つ

の国には人々の発見を待っている千の顔があつて、「一つ」で定説を語ることはできません。非常に清潔な東京の街とクラクションの聞こえた記憶がないことはどちらもどうにも不思議です。たとえ車馬の往来が盛んな国際的大都市でも、浮かれた消耗品の数々もほぼないようです。東京で夜九時半ごろ、東京タワーの方に出かけると、街はもう静まりかえっていて道行く人も少なく、前方に照明のきらめく東京タワーが道しるべとなっているだけでした。それは決して東京の全部ではなく、午後に銀座で買い物をしていたときは、慌ただしく奔走する人の流れを見かけ、大都市の商業の息吹を感じました。銀座の中の東京は上海、寧波の繁華街とだいたい似ています。この点は大阪もそうで、人の往来が盛んで、贅沢で享樂的な商業地区に派手さにとぎわいがあふれていました。

静謐な京都は日本にとってどのような存在なのでしょう？そして滋賀県の水郷と琵琶湖はどのような日本を見せているのでしょうか？滋賀県の水郷は人と自然の調和がとれた付き合いの生活の息づかいに満ちていました。江戸川清掃工場と同じように、人々が自然を征服した後の再考と進歩です。その夜バスの車窓から京都の大通りを観察していると、点々と灯る黄色の明かりが人を静かにさせ、邪魔して壊しては忍びないと感じました。明け方に独りでホテル平安の森の近くを通り沿いに通ると、誤って踏み入った神社の砂れきの上で近くの神霊を驚かせてしまったように感じました。これと比べると伏見稲荷大社の参道ではかなり安心し、思い切って神前の大きい鈴を揺らし、稲荷大神に俗世の願いを伝えたりもしました。東京の浅草寺と伏見稲荷大社はどちらも俗世の願いに満ちていて、人の感情を満載している神仏は安寧ではありません。

龍安寺と延暦寺は違いました。龍安寺の観光客は多かったのですが、庭は商売くささに染まっていない姿でした。延暦寺は山林にあるため妨げになる人も少ないようでした。延暦寺では初めて座禅を体験し、確かに自分を考え直すよい機会でした。もしかすると日々の奔走に疲れた俗世間の人にとっては山間で心を静めてこそ止観できるのかもしれない。お恥ずかしい話、私の郷里は仙居県と天台県の近くなのですが、天台宗の禅の道理を詳しく調べたことが一度もなく、国清寺を拝観したこともないのに、今回の日本の旅で天台宗に少し触れたのです。中国と日本は歴史上の文化交流歴が長く、日本は交流を吸収すると同時にその特有な文化を絶えず発展させて残し、今なお愛護しています。皇居と二条城の古い城壁、今なお追憶する首里城のどこにも呉服姿の少女が見られ、そのたびいくらか物寂しさを覚えました。今後は中国の街にも漢服で出かける青年を見られるようになってほしいと願ってもいます。私も中国がすでに文化の復興に努めていることも知っていますが、この面では中国はすべて日本に学ばなければならないケースがたくさんあります。

日本の学生との交流時、中日の間で社会の状況はやはり近いのだと気づきました。少子化問題についての討論は都市と農村の差、子育ての圧力、青年の生活する圧力、青年の政治の願望表現の面まで広がりました。今日の日本はすでに厳しい高齢化の圧力に直面しており、中国はあるいは人口の基数が大きいためかしばらくは著しい高齢化の圧力が見られ

ていませんが、そこから将来の傾向を予見することはできます。中日両国の青年にとって、できることはただ深く問題を理解して自身の責任を尽くすべく努めることだけかもしれません。多くの日本の学生が中国に対して強烈的な理解願望を持っており、優秀な日本の学生が将来は中国へ交換学習に渡ることは喜ばしいです。大阪のドラッグストアで買い物をしていたとき、中国の観光客にあまり友好的でない中国人店員に出会い、偶然中国人が海外で残す悪い印象を感じましたが、私は中国の発展、国民の資質の向上に従って、国民の海外での印象はきっと次第に改善すると信じています。

最後に沖縄での一泊二日の話をしたいと思います。まさに文章の始めに話題にしたとおり、今の江蘇・浙江・上海地区は長雨のため湿った寒さにこりごりなので、沖縄の七色の海と暖かな日差しが本当に偲ばれるのです。実際には、沖縄のひめゆり平和祈念資料館は八日間の日本の旅の中でただ一つ涙の流れたところでした。第二次世界戦争の時の中国の抗日戦争は今や両国の避けてくれない話題ですが、ひめゆりたちのおかげで、別の視点から、立場を変えて戦争を考え、沖縄を知ることができました。間もなく沖縄を離れるとき心を離れないある種の感情がありました。沖縄の救われなさ執着、平和と尊厳に関してです。「弥勒世因果果報」の歌詞の引用によって表します。

海ぬ美(ちゅ)らさ 青い海ぬ美(ちゅ)らさ

这里有美丽的大海 美丽的蓝色的大海

我(わ)した島ぬ 永遠(とうわ)ぬ宝 永遠(とうわ)ぬ宝

我们的小岛啊 是永远的宝藏 永远的宝藏

空(すら)ぬ深さ 碧い空(すら)ぬ深さ

这里有深邃的天空 深邃的碧色天空

我(わ)した沖縄(うちなー) いちまでいん いちまでいん

我们的冲绳啊 要永远在一起 永远在一起

花ぬ美(ちゅ)らさ 鳥(とうい)ぬ声(くい)ぬ清(しゅ)らさ

这里有美丽的花儿 清脆的鸟声

美(ちゅ)ら島ぬ 想(うむ)い知らさ 想(うむ)い知らさ

美丽的小岛啊 深深记在心里 记在心里

人(ふいとう)ぬ秀らさ 肝(ちむ)持(む)ちぬ秀らさ

这里有优秀的人们 心地善良的人们

肝(ちむ)心(ぐくる) 玉ぬ命 玉ぬ命

互相体谅的人们 如玻璃的生命 如玻璃的生命

神々宿(やどう)る 沖縄(うちなー)ゆでむぬ

众神栖息的地方 我们的冲绳啊

世界(しけ)ぬ世果報(ゆがふ) 守てい給(たぼ)り 守てい給(たぼ)り
守护着世界的世界报 守护着这份恩赐

波ぬ想(うむ)い 太陽(ていだ)とう風(かじ)ぬ想(うむ)い
海波, 太阳和清风

戦世(ゆ)ぬ 哀り知らさ 哀り知らさ
不知道战世的悲哀 不知道战世的悲哀

忘(わし)てい忘(わし)ららん 戦さ世(ゆ)ぬ哀り
战世的悲哀 (人们) 忘也忘不掉
童達(わらびんちゃー)に 語てい行かな 語てい行かな
要对孩子们怎么讲述呢 怎么讲述呢

星(ふし)ぬ光 我(わ)した地球(ふし)ぬ光
星星的光 我们的地球的光啊
弥勒(みるく)世果報(ゆがふ) 願(ぐわん)立ていら 願(ぐわん)立ていら
期盼着弥勒的世界果报 期盼着

印無(ね)えらん くぬ島どうやしが
如果没有印记的话 (指战争) 这个小岛会怎么样
平和ぬ想(うむ)い 深さあむぬ 深さあむぬ
和平的愿望 深深的印在心里 印在心里

人(ふいとう)ぬ命(ぬち)や 天(ていん)からぬ恵(みぐ)み
人们的生命啊 是天的恩惠
永らいてい 命(ぬち)どう宝 命(ぬち)どう宝
永恒下去的 是生命这种宝物 生命这种宝物

地球(ふし)ぬ姿(しがた) 変わる事(くとう)ねさみ
地球的样子 不会变化
変わるむぬや 人(ふいとう)ぬ心 人(ふいとう)ぬ心
变化着的东西呀 是人的心 人的心

人(ふいとう)とう人(ふいとう)ぬ 争いや捨(し)ていてい
人和人之间 停止纷争吧

世界(しけ)ぬ平和 真に想(うむ)い 歌てい願(にが)ら
唱着真心期盼世界和平的歌
語てい願(にが)ら 歌てい願(にが)ら
说着期望着 唱着期望着

その中の景色は沖縄という美しい小島だけでなく、日本という動静のちょうどよい海に囲まれた国、勤勉で落ち着いた民族にも向けられています。戦争がもう発生しないこと、将来また日本を訪れ沖縄で海の幸のごちそうを味わえること、平和と友好が中日両国の間で永久に存在することを願っています！

日本で出会ったやさしさ



姜 昱先

東北師範大学 外国語学部日本語学科 1年

(原文中国語)

「いつもロシア文学を読んでいたれば、その人の度量がどんどん大きくなる。いつも日本文学を読んでいたれば、その人の心根がどんどんやさしくなる。」翻訳家の林少華はこのように言っています。日本文学の愛好者として後半の話には深くうなずけます。高校のとき、日本文学が私に付き添ってどのくらい孤独な苦悶の時間を過ごしたか分かりません。私の心の底の荒れ果てた薄暗い隅を何度照らしてくれたかも分かりません。言葉で伝え紛らすことができなない情緒、感動もありますが、日本文学はいつもきめ細かい文脈を創りだして適切に私の気持を述べ、詠嘆してくれます。読んだその時、心に共鳴が生じ、胸のうちの淡い憂いや悲しみがひととき雲散霧消します。

今回の日本の旅で、日本文学を読むとき心に届く感覚のようなきめ細かいやさしさをまた感じました。日本の街頭を歩いて、国内と風格のまるきり違う建物、左側通行の交通ルール、建物の前後で林立する各種のかな文字の広告看板を見ても、意外に遠く異国の地に来たという感じはしませんでした。思うに、日本人のやさしく親切的な接し方で疎外感が取り除かれ、彼らのきめ細かい文学と全く同様に内心の不安が慰められたのでしょうか。日本で最も普通のコンビニに踏み込んだとしても、店員さんは微笑んでいらっしゃいませと挨拶してくれます。求めている商品が欠品していると、たとえ店員さんが完全に白髪のおじいさんでも、頭を下げて謝ってくれます。日本はすでに今の世界の資本主義の強国になっていますが、商店のこのような売場には決して氷のように冷たい金銭の取引だけが存在するのではなく、親しみのある微笑みと挨拶が暖かみを感じさせてくれます。

もちろん資本主義の強国である日本はやはり巨大な機器のように高強度で動いていま

す。深夜に窓際で眺めると、遠い所のオフィスビルの灯りがついています。しかし、日本人は自分の疲れを不満に変えて発散していないということを目にしました。大阪での夜、先輩たちと街を散歩していたときの事です。すでに十一時で、多くの人は退勤して家路についていました。そこで目にしたのは、若い勤め人がにぎやかに談笑し、少し年上のスーツを着た人が電車で静かに本を読む姿です（日本の本は大部分が小型に設計されており、ポケットに入ります）。眉をしかめる、ため息をつくといった極度に虚脱した状態を見せず、日本人は自分の疲れをうまく管理できているのです。忙しくて疲れていても身の回りの人に自分の疲れを押しつけないのも、日本人のやさしさの現れでしょう。

秋葉原で日本学生の同行した午後、いっそう直観的に日本人のきめ細かいやさしさを感じました。印象の中の日本人と違い、初対面の見慣れない人との付き合いで仏頂面をせず、彼らは私たちとずっと談笑していました。私の日本語は四か月しか学んでいないので、語彙が少ないのに、彼らはできる限り基礎的な語彙を使って私と根気よく交流してくれて、日本語の門外漢である私でも彼らの表現する気持ちを完全に分かることができたのです。上野公園では、たくましい西郷隆盛の彫像を前に、ある日本の学生が「この顔ドラえもんに似て見えない？」と冗談。私は思わずにっこりしました。本来は日本でも夏目漱石のような渡欧から帰った大文豪ばかりがしゃれに優れているのではなく、一般人の日常会話も面白いユーモアに満ちているのですね。

本を読むよりも、本当は景色を読むほうが好きです。景色を読むよりも、人の顔と声や感情を読むほうが好きです。付き添って同行してくれた先生や仲間たち、今回の活動を支援する日本財団、そして偶然出会った日本の友人みんなの暖かさや善良さに限りなく感動しました。この七日間の日本の旅が一冊の本だとしたら、私は「やさしさ」を前書きに、道中で得られた善意を行間の注釈にして、最後に中日の友好と平和に対する期待をこの本の続く結末にしたいと思います。

七日間日本旅行記



郝 顔 大連海事大学 情報科学技術学院通信工学4年

(原文中国語)

Day 1

好奇心を胸に、心地よい海風に吹かれ、ついに日本の東京、羽田空港に降り立つことができました。ちょうど一時間の時差にうろたえつつ、みんなと合流して皇居の周囲を散策し、音を立てる砂利を踏みしめると、心の中もそわそわと動揺しました。東京は一体どんどこ

ろ？北京や南京と雲泥の差があるの？日本で最も豪華な大通り、銀座がその答えをくれました。道行く人は慌ただしいのに落ち着いていました。きちんとした身なりの人もいましたが、個性的な人が多く、コンパクトで大胆な味わいがありました。どこのお店もきちんとしていて、品物のレイアウトに少しも雑味がなく、至る所が極彩色の美に輝いていて、とても清潔でした！

そしてレモン汁の添えられた河豚に、お刺身、おこわ、アイス、おだんご！要するに何でもひとつおとり独特なご飯を食べたと言えます。珍しい日本料理！そして東京タワーの散策では異国情緒！国外で元宵節を過ごしたのは初めてで、家族と一緒にではありませんでしたが、とても楽しい気持ちでした！

Day 2

寝ぼけ眼をこすってたっぷりの朝食を摂り、8時半に江戸川区のごみ処理場見学へ。得たものは多く、ごみの分別と処理技術の重要性を痛感しました。1200度もの高温は、隔離されていてもお熱く、ずっと汗をかいていました。

国会議事堂では衆議院と参議院の重々しく古風で質朴な建物を鑑賞し、ポスト、鍵とガラスのエピソードを聞きました。

東京湾で見たレインボーブリッジは星海湾大橋っぽい感じがありましたが、異国の香りもしました。自由の女神像はやや唐突に感じました。フランス人から贈られたものだそうです。太陽楼のランチはとても中国の味わいがありました。

日比谷公園を散歩して、孫文と宋慶齡が結婚写真を撮ったときの話を思い出しました。お目にかかった日本財団の理事長は80歳ながらとてもお元気で、面白くユーモアがあり、とても感心しました！

最後は夕食に招かれ、しゃぶしゃぶを頂きました（とても高いとだけ知っていて、うかつに食べられませんでしたが）。すごく薄くて、直接お湯で煮て火を通し、酢やごまだけだけで食べるのは、風味が損なわれず美味しいのでしょうか。かえって口に入れるとすぐとろけ、じっくり味わうと、意外にも濃密な火鍋以上のものがありました。

Day 4

午前5時に起き6時に出発し、一路飛行機に揺られて、古くは琉球王国と呼ばれていた沖縄。涼しい海風と入り混じる霧雨を浴び、一気に冬、春を離れて、直接夏になったかのようでした。東方のハワイという名に恥じません。空港内は美しい花に溢れ、蘭が美を競っていました。道中では熱帯の果物パイナップルがツンデレのように道ばたの樹上に掛けられていました。立派なシュロの木がそびえ、巨大な葉身は芭蕉扇と匹敵する見事さでした。びっしり植えられたサトウキビの枝葉がざらざらと音を立て、風と雨に当たっているさまは喜んでいるかのようでした。生い茂った常緑樹は活気に溢れ、緑に満ちみちていて、最低14度、最高26度あり、海上に渡された縄のような沖縄は天候が順調で生き生きとしていました。

沖縄は神の寵愛を受けているとよく言われます。資源こそ多くないものの、とりわけ恵ま

れた風土のおかげでさまざまな農作物がよく育ち、住民にとって天然の美味しい食品となり、また外地に出る気がない多くの若者には快適な居場所と高収入の仕事があります。高速道路を進んでいくと、目に映る絵のような海、林木、赤い瓦、シーサーがすごい速さで遠ざかり、思わず当地の住民、仙人のように世俗の濃厚な苦楽を超越した(サトウキビ、ニガウリの)生活がうらやましくなりました。

射雕英雄伝の中に桃花島というところがあり、桃の花が降りしきる詩の境地で、気ままに暮らせるといいます。この現実の中の沖縄の小島はその桃花島より美しいのですが、まさか小島は海水が潤して養うと、すべてこんなに独特の風情を持つようになるのでしょうか？

しかし優美な地区の美德にはきっと勤勉な地元の人が欠かせません！具体的なワークスタイルと習慣は、とても参考になりました。

飛行機を降りてすぐ向かったのは平和祈念資料館です。広くはないものの、当時の沖縄が受けた苦難が十分に再現されていました。生き残った経験者が言うように、世界が永遠に平和であることを本当に望んでいます。

慌ただしく昼食を摂り、当地で唯一の古跡、首里城を訪ねました。外城と内城に分かれており、自分には違いが分からなかったのですが、確かに覚えておく価値はあります。歴代の琉球国王の称号、年代関係、城内の主要な建物の模型の配置と構造が展示されていました。立派で堂々とした玉座を眺めて、当時の統治の様子を想像すると、中国の当時の発達していたさま、琉球王国との友好関係がぼんやりと浮かびました。今の琉球はこの美しさなので、中国もだんだん繁栄に向かうことを期待します。

4時半にはこれまで見た中で最も豪華なオーシャンビューの部屋に着きました。遠くにとてもきれいな西海岸線を眺めることができます。ライトブルー、薄緑、青でも緑でもない七色の海水が目に入り、やさしい日光が照らし波が打ち寄せると、天然の琥珀色が浮かんだり広がったりしていました。たびたび海風が吹くと五メートルもない波が巻き起こり、海面全体が持ち上がるさまはさながら軽い紙切れのようで、心が惹かれます！ここの海は清潔で、長寿の沖縄県民を養ってきたのでしょう。夕飯はとても美味しく、琉球歌舞は激しくぶつかり合う激情に満ちていましたが、上品で清らかな女性のたおやかさも混じり合っていました。舞踊は最もすばらしいスポーツだと思っているので、舞踊の鑑賞は最も満足できる楽しみです。自分も挑戦して、のびのびと筋骨を広げ、元気をもっと奮い起こせたらと思いました。青春の美しさ、自然美、生命力は天からの最大の贈り物です。責任も引き受ける前提で努力して開放すると、天上の宮殿に向けたラッパのように、ぶうぶうと前へ突き進むのです！人生を豊かにする経験の機会にはできる限り獲得するべきで、善意を持って人を助け、心には誠意と自信を持って生存してこそ、立派に楽しく生活できるのです！

最後に、与えられたすべての物事に心から感謝しています。あるいは苦難、あるいは細やかな気遣いや愛に感謝して、最も若い年月の中で目の前の温泉を体験できたこと、砂浜を散歩できたこと、部屋からの眺望に感謝しています！

きっと何もかもがどんどん良くなります！そしてきっと、多くのことで、努力するほど幸運

になります！

Day 5

7時半に起床し、食後にゆっくりと西の海岸を散歩していると、東から日が昇ったときの色鮮やかで美しい朝焼けがいつの間にか白い光に変わり、綿飴のような雲を従えていました。日光、砂浜、波、ヤシの木、そして細かい砂がいっぱいの半分濡れたジャージのズボン。

小さい沖縄の島で最も美しいのはなんと言っても色とりどりの海水です！ライトブルー、薄緑、青でも緑でもない色の水の層、押し寄せる波には紺碧の空、真っ白い雲、そして純白のオーシャンリゾートが映り、この上ない清らかさと爽やかさを感じました。まさにちょうど一番いい時期で、蓬莱の仙境よりも爽やかです。

さんご畑ではサンゴの繁殖過程について講義を聞きました。ひとつひとつが七色のサンゴの卵、きわめて精巧なサンゴの苗を眺め、思わず造物主の物資の神秘に感嘆しました。サンゴの植え付けを見るとわくわくしました。国際通りを忙しく回るのは、慌ただしい旅人だからということにして、表面だけざっと見ました。

最後、景色が改めて美しく、あまり酔わせないで！

Day 6

朝7時半に起床して二つのトンネルを通り、琵琶湖に沿って生水の郷へ。湖面には幻想的な霧がかかり、果てしなく広い湖水を背景に細長い小島が見え隠れしていました。生水の郷のような山里は若い人が住みたがらないところですが、お年寄りがたくさんいて、豊かな生活経験と蓄積した智慧を持っていました。どこにも見られる小川がきれいで平らなアスファルト道路に沿って流れており、川水は静かに流れて、濃い青紫色をした鯉を取り囲んでいました。魚の下にあるバイカモがくっきりと見え、密集した小さな緑の葉身にまばらな白い花が載って、ひときわ上品でした。川の水は70パーセントが山から流れて来るもので、残りは湧き水だそうです。直接パイプをつなげば水を汲むことができ、こうした流水により雑食の鯉がやってきて、残飯の掃除係となります。生魚湯を味わうと、いっそうこうした恵み、人が自然と調和して共存する環境に感謝したくなりました。ふと「この池の水はなぜこんなにも清らかに澄んでいるのか。それは泉の源から絶えず新鮮な水が流れ込んでいるからだ」という詩を思い出しました。古人の知恵は並外れていると言えますね！また、道ばたの小屋はすべて焼杉で建てられており、横は作業場、縦は民家で、規則正しくきちんとしていました。まだらになっている杉の炭が細長い木板の上に積み重ねられ、さながら精巧で美しい芸術品なのに防虫と補強という機能があるそうです。民家の庭に積まれた柴もきちんと揃えられており、側面に住民たちの職人精神が現れていました！

ある農村がこれほど絵のようすばらしさに整えられ、夢のように澄みきって、詩のようしなやかで美しい景色だなんて、本当に予想に反するものでした。しかし大げさに騒ぐこともなく、いったい職人精神のある人々がいれば、このような技術も可能なのでしょうか？

午後は元の道に戻って龍山寺を訪ねました。石庭の奥深さはのろまものですぐに悟ることができず、世界文化遺産である砂石の配置とは、すっかりお見それしました。また、足る

を知る者は常に楽しいという哲理を復習しました。心に得られたものが確かにあります！

慌ただしい足どりは1200年以上前に山上で建てられた延暦寺へ。山道の紆余曲折は険しくて異常でした。寺院は古色ただよっていて、原始的な寺院には引き立てる花木こそなくとも、同じような精神修養の不思議な効用があるのです！

最後、またどうしても感慨を覚えてしまったのは、仕事をするにはまずその道具からということです！優れた人材には相応の地位があります。効率が高いほど丁寧なのは、白い雲が墓石を抱くかのように、付き添って生きるとともに競い合うこともできます。墓石のように遠く離れ追いつこうとも思えないなら、白い雲のように心の中の墓石を追い求めたいです！

Day 7

月桂冠酒造を見学し、ついでに三杯試飲しました。濃いアルコールの匂いが腸を突き抜け、くらくらとしました。初めてでこれだけ飲んだということは、自分の酒量がまずまずだということです。その後は龍安寺、伏見稲荷大社。どちらも霊性のある神聖なところで、私のような紅塵の中の俗人にはしばらく味わうことはできません。たぶん酸いも甘いもかみ分けから、少し目覚めて、悟れるようになって禅の高みに届くべきなのでしょう！

最後に、さっきお話ししたとおり国外の旅行は初めてでした。誰の人生にもたくさんの初めてがありますが、そのたくさんの初めての中にはいつも、個別に人生全体に対してこの上ない影響を生じることがあります。今回は日本の風土と人情、そして名所旧跡と見聞を広めました。このような大きくはない島国が、今のように発達し、これほど優越したレベルまで発展できたことには本当に驚きで、その背後にはこのような業績を支える多くの優良なのが間違いなくあるのだと思います。このうち入念さと真剣さが核心的要素で、自分もそのように振舞い努力して専門に集中しようと思います。

この初めてはこの上ない自信もくれました。自分でも何らかの方法で自分の野心を助けられるとは思ったことがなかったからです。なので多くの場合、何事が起きる可能性もあるので、自分を信じ、努力するほど幸運になれます！今回これほど多くの優秀な先生方と優秀な仲間に出会えたことは、本当に大きな喜びです。言うなれば縁は天意がおのずとありますが、めぐり会うには誠意と運も必要です！若いうちの時間を、心配事の少ない歳月を大事にして、大胆に試し、突破して、新しい事物に触れ、新たな視野を開きます！きっと遠くはないところにもまだまだ大きなチャンスが待っています！